鳥取県教育文化財団調査報告書　91

一般国道９号線（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

鳥取県東伯郡赤碕町

松谷中峰遺跡
別所中峯遺跡

2004

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書91
一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ
『松谷中峰遺跡　別所中峯遺跡』

正　誤　表

お手数ですが、以下のとおり訂正の上、ご活用ください。

頁　行	誤	正
目次	第2節　古墳時代前期の調査	第2節　弥生時代末から古墳時代前期の調査
目次	第5章　特論	第5章　考察
挿図目次	第7図　A区出土遺物	第7図　A区出土石器
挿図目次	第36図　遺構外出土遺物	第36図　B区遺構外出土遺物
挿表目次	第26表　出土遺物の調査結果とまとめ	第26表　出土遺物の調査結果のまとめ
22頁18行目	遺構確認面下には	遺構確認面下は
写真図版　PL.6	2．B区中央部斜面調査後撮影（北から）	2．B区中央部斜面調査後撮影（西から）

一般国道９号線（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

鳥取県東伯郡赤碕町

松谷中峰遺跡
別所中峯遺跡

２００４

財団法人　　鳥取県教育文化財団
国土交通省　　倉吉河川国道事務所

SK13から八橋第８・９遺跡を望む（西から）

巻頭図版２　別所中峯遺跡

１．SK３焼土塊検出状況（西から）

２．SK13出土土器

序

赤碕町は、北に日本海を望み南に秀峰大山を仰ぐ風光明媚な自然に恵まれた土地で、平野部での稲作や丘陵地での果樹栽培を主とした農業、沿岸漁業などの盛んな地域であります。また建武の新政前夜、後醍醐天皇が行在された山として全国に知られる船上山を中心とした仏教文化の基盤を持ち、多くの歴史遺産に恵まれた街でもあります。過去の発掘調査においても縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く発見されており、この周辺において古くから生活の営みがあったものと考えられます。

近年、鳥取県では山陰地方の弥生文化を考える上で重要な発見が相次いでいます。この数年の間に妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとした遺跡が相次いで調査され重要な成果が得られています。これまでの弥生時代の遺跡発掘調査により、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。我が県の先人が残した素晴らしい文化を後世に伝承することは、現在に生きる我々が成し遂げなければならない重要な責務です。

さて、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団では、国土交通省の委託を受け、この事業に係わる一般国道９号（東伯中山道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の調査を実施しております。

そのうち、松谷中峰遺跡では、古墳時代の住居跡と考えられるもの、別所中峯遺跡では、古代の製炭土坑など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認し、今回、調査結果を報告書としてまとめることができました。

本書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり埋蔵文化財に対する理解や認識がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉事務所，赤碕町教育委員会、並びに地元関係者、調査に参加していただきました作業員の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長　有田博充

序　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉工事事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取―島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡東伯町から西伯郡中山町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成15年度は、「中尾第一遺跡」、「井図地頭遺跡」、「三林遺跡」、「笠見第３遺跡」、「久蔵峰北遺跡」、「蝮谷遺跡」、「岩本遺跡」、「八橋第８・９遺跡」、「別所中峯遺跡」、「松谷中峰遺跡」、の10遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、財団法人埋蔵文化財センター東伯調査事務所によって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「松谷中峰遺跡」と「別所中峯遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県教育委員会ならびに財団法人鳥取県文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成16年３月

国土交通省　倉吉河川国道事務所
所　長　矢田光夫

例　　言

1．本書は、平成15年度に行った国土交通省一般国道９号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業による、松谷中峰遺跡（まつたになかみねいせき）、別所中峯遺跡（べっしょなかみねいせき）の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地は以下のとおりである。

松谷中峰遺跡：東伯郡赤碕町大字松谷字中峰542～544・西中峰546・547他

別所中峯遺跡：東伯郡赤碕町大字別所字中峯655-1

3．本書で示す標高は、４級基準点Ｈ10－４－156、Ｈ10－４－158を基点とする標高値を使用した。方位は、公共座標北を示す。なお、座標北に対し磁北は６°27′25″西偏、真北は０°22′35″東偏する。Ｘ：、Ｙ：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。

4．本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の１／25，000「赤碕」「伯耆浦安」、赤碕町地形図１／5，000「赤碕町都市計画図」No.２・４・５を使用した。

5．本報告にあたり、出土石材鑑定を赤木三郎氏に、別所中峯遺跡の現地指導を森内秀造氏に依頼した。

6．本報告の執筆は、鍋倉、大野、福井が分担し、目次と各文末に文責を記した。編集は大野が行った。

7．本報告書に使用した遺構・遺物写真は、航空写真を除いて文化財主事及び調査員が撮影した。

8．「竪穴建物」について、従来は「竪穴住居」と呼称していたものであるが、これらすべてが“住居”という訳ではなく、様々な機能のものが含まれている可能性があるため、本書では「竪穴建物」を使用した。工楽義通　1998「竪穴建物の機能」『先史日本の住居とその周辺』浅川滋男編　同成社

9．出土遺物、図面、写真等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

10．現地調査及び報告書作成にあたり、上記の方々のほか、立命館大学木立雅朗先生をはじめ、多くの方々に御指導、御協力いただいた。

凡　　例

1．本報告書で用いた遺構・遺物の略号は以下のとおりである。なお、番号は遺跡単位で通し番号をつけている。

（遺構）SI：竪穴建物跡、SK：土坑、SD：溝、SS：段状遺構、Ｐ：ピット

（遺物）記号なし：土器・土製品、Ｆ：鉄関連遺物、Ｓ：石製品

2．本報告書で使用している遺構名は、発掘調査時に使用したものと一部異なるものがある。遺構名を変更したものを以下に示しておく。

旧（発掘調査時）→新（報告書）：SI３→SK13、SI４→SI３

4．遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーン及び記号は、特に説明がない限り以下のものを表す。

地山　　焼土（赤化面）　　焼土（還元焼成）

●（土器・土製品）、■（石器・石製品）・・・遺物出土ポイント

3．遺物実測図の縮尺については、土器１／４、石器・土製品１／２、鉄器１／１を基本とし、それぞれ大型、小型のものについては適度な縮尺で掲載している。

4．法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。本報告書における土器類の編年・年代観は主に以下の文献に拠る。

清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編』正岡睦夫他編、木耳社

牧本哲雄　1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』鳥取県教育文化財団

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

目　次

第１章　調査の経緯 ……（大野）1
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　調査の経過と方法 ……1
　第３節　調査体制 ……3
第２章　位置と環境 ……4
　第１節　地理的環境 ……（鍋倉）4
　第２節　歴史的環境 ……（淺田・岩井・原・福井）4
第３章　松谷中峰遺跡の調査 ……7
　第１節　遺跡の立地と層序 ……（大野）7
　第２節　Ａ区の調査 ……（大野）11
　第３節　Ｂ区の調査 ……11
　　（１）概要 ……（大野）11
　　（２）竪穴建物跡 ……（大野）11
　　（３）土坑 ……（鍋倉・大野）13
　　（４）溝状遺構 ……（大野）19
　　（５）遺構外出土遺物 ……（大野）19
第４章　別所中峯遺跡の調査 ……（大野）22
　第１節　遺跡の立地と層序 ……22
　第２節　古墳時代前期の調査 ……25
　　（１）概要 ……25
　　（２）竪穴建物跡 ……26
　　（３）土坑 ……30
　第３節　時期不明遺構の調査 ……（大野）35
　　（１）概要 ……35
　　（２）製炭土坑 ……35
　　（３）その他の土坑 ……39
　　（４）段状遺構 ……39
　　（５）溝状遺構 ……40
　第４節　遺構外出土遺物 ……（大野）41
第５章　特論 ……43
　第１節　別所中峰遺跡における焼成土坑の分析 ……パリノ・サーヴェイ株式会社　43
　第２節　別所中峯遺跡における放射性炭素年代測定結果……株式会社 古環境研究所　52
　第３節　別所中峰遺跡出土土器に付着する赤色物質の分析 ……パリノ・サーヴェイ株式会社　54
　第４節　別所中峯遺跡出土鉄滓の金属学的調査……九州テクノリサーチ・TACセンター（大澤正己・鈴木瑞穂）　57
第６章　まとめ ……（鍋倉・大野・福井）61
写真図版

挿図目次

第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 4
第３図　周辺遺跡分布図 …… 5

松谷中峰遺跡
第４図　基本層序柱状図 …… 7
第５図　松谷中峰遺跡調査前測量図 …… 8
第６図　松谷中峰遺跡調査後測量図 …… 9・10
第７図　Ａ区出土遺物 ……11
第８図　SI１ ……12
第９図　SI１出土土器 ……12
第10図　SI２ ……13
第11図　SK１ ……13
第12図　SK２ ……13
第13図　SK３ ……13
第14図　SK５ ……13
第15図　SK６ ……14
第16図　SK４ ……14
第17図　SK４出土土器 ……14
第18図　SK７ ……15
第19図　SK８ ……15
第20図　SK９ ……15
第21図　SK10 ……15
第22図　SK11 ……15
第23図　SK12 ……15
第24図　SK13 ……16
第25図　SK14 ……16
第26図　SK15 ……16
第27図　SK16 ……16
第28図　SK17 ……16
第29図　SK18 ……17
第30図　SK19 ……17
第31図　SK20 ……17
第32図　SK21 ……17
第33図　SD１ ……17
第34図　SD１出土土器 ……18
第35図　SD２ ……19
第36図　遺構外出土遺物 ……20

別所中峯遺跡
第37図　基本層序柱状図 ……22
第38図　別所中峯遺跡調査前地形測量図 ……23
第39図　別所中峯遺跡調査後地形測量図 ……24
第40図　SI１ ……25
第41図　SI１出土土器 ……25
第42図　SI１出土鉄関連遺物 …26
第43図　SI２ ……27
第44図　SI２出土土器 ……27
第45図　SI３ ……28
第46図　SI３遺物出土状況 ……28
第47図　SI３出土土器 ……29
第48図　SI３出土石器 ……29
第49図　SK５出土土器 ……30
第50図　SK５ ……30
第51図　SK13 ……31
第52図　SK13遺物出土状況 ……31
第53図　SK13出土土器 ……32
第54図　SK13出土鉄関連遺物 …32
第55図　SK13出土石器 ……33
第56図　SK１ ……35
第57図　SK２ ……36
第58図　SK３ ……36
第59図　SK４ ……37
第60図　SK６ ……37
第61図　SK７ ……37
第62図　SK８ ……38
第63図　SK10 ……38
第64図　SK11 ……38
第65図　SK10出土石器 ……38
第66図　SK９ ……39
第67図　SK12 ……39
第68図　SS１ ……39
第69図　SS１出土石器 ……40
第70図　SD１出土土器 ……40
第71図　SD２出土石器 ……40
第72図　遺構外出土土器 ……41
第73図　遺構外出土石器 ……42
第74図　SK１試料のＸ線回折図 48
第75図　SK３試料のＸ線回折図 49
第76図　SK６試料のＸ線回折図 50
第77図　SK11試料のＸ線回折図 51
第78図　SK13出土注口土器底部片付着赤色物質のＸ線回折図 …56

挿表目次

松谷中峰遺跡
第１表　A区出土石器観察表 ……11
第２表　SI１出土土器観察表 ……12
第３表　SK４出土土器観察表 ……14
第４表　SD１出土土器観察表 ……18
第５表　遺構外出土土器観察表 ……21
第６表　遺構外出土石器観察表 ……21
第７表　ピット計測表 ……21

別所中峯遺跡
第８表　SI１出土土器観察表 ……26
第９表　SI１出土鉄関連遺物観察表 ……26
第10表　SI２出土土器観察表 ……27
第11表　SI３出土土器観察表 ……30
第12表　SI３出土石器観察表 ……30
第13表　SK５出土土器観察表 ……30
第14表　SK13出土土器観察表 ……34
第15表　SK13出土鉄関連遺物観察表 ……34
第16表　SK13出土石器観察表 ……34
第17表　SK10出土石器観察表 ……38
第18表　SS１出土石器観察表 ……40
第19表　SD１出土土器観察表 ……40
第20表　SD２出土石器観察表 ……40
第21表　遺構外出土土器観察表 ……41
第22表　遺構外出土石器観察表 ……42
第23表　薄片観察結果 ……44
第24表　供試材の履歴と調査項目 ……60
第25表　供試材の組成 ……60
第26表　出土遺物の調査結果とまとめ ……60

写真目次

松谷中峰遺跡
写真１　重機による表土剥ぎ …… 7
写真２　人力による精査 …… 7
別所中峯遺跡
写真３　試掘トレンチを掘る ……22
写真４　重機による表土剥ぎ ……22
写真５　周辺の地形（南から）……29
写真６　現地説明会風景 ……29
写真７　作業風景（SK13） ……33
写真８　椀型滓（BEN－１）のマクロ組織 ……59

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

国道９号は京都市から兵庫県、鳥取県、島根県を通り山口県下関市まで続く幹線道路である。山陰地方では、この国道９号線の交通混雑緩和及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部では、平成15年４月に青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として開通したほか、東伯中山道路、北条道路も計画、施行されている。

このうち東伯中山道路の計画地内には、赤碕町に松谷中峰遺跡、別所中峯遺跡、東伯町には笠見第３遺跡、八橋第８・９遺跡、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、岩本遺跡、三林遺跡、井図地頭遺跡、中尾第１遺跡など、多くの遺跡があり、赤碕町教育委員会及び東伯町教育委員会は平成14年度から、国庫補助事業として試掘調査を行った。

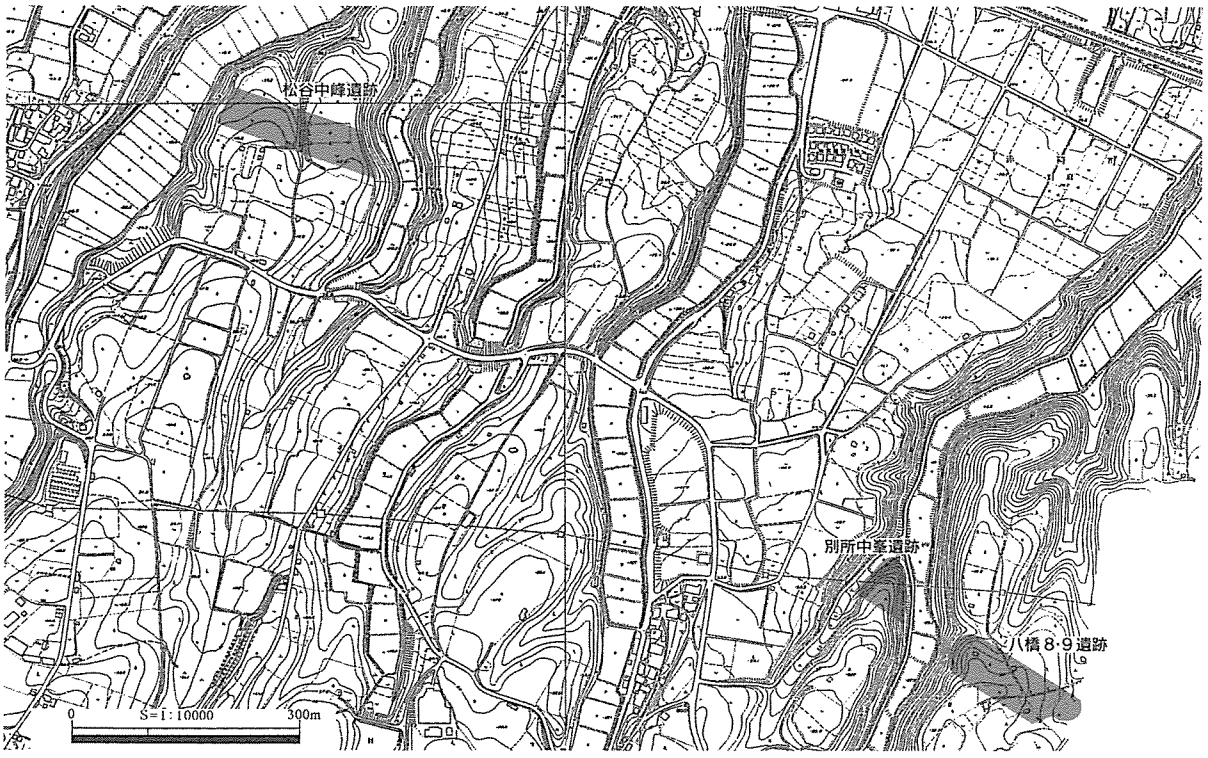
この結果を受け、国土交通省中国地方建設局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の３に基づく通知を行った上、県教育長の通知により財団法人鳥取県教育文化財団に記録の作成のための発掘調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく届出を提出し、平成15年度から、埋蔵文化財センター東伯調査事務所が発掘調査を担当することとなった。

調査面積は、松谷中峰遺跡が7.473㎡、別所中峯遺跡が3.175㎡である。

第２節　調査の経過と方法

（１）調査区の名称と調査方法

松谷中峰遺跡　調査対象地は、谷をはさんだ南北に伸びる２つの丘陵よりなり、現況は梨栽培などの果樹園として利用されていた。このうち谷部には南北にはしる営農者が使用していた農道があり、便宜上農道を含む調査区の東側をＡ区、西側をＢ区とした。



第１図　調査地位置図

別所中峯遺跡　特に調査区を設けず調査対象地を一括して調査をおこなった。

両遺跡とも、表土剥ぎはすべて重機で行った。表土剥ぎ終了後、公共座標第Ｖ系に基づく10ｍ間隔の基準杭を設定した。これらの杭に松谷中峰遺跡では南北軸に算用数字を、東西軸にアルファベットを付し、別所中峯遺跡では南北軸にアルファベットを、東西軸に算用数字を遺跡ごとに別個につけ、「Ａ１杭」のように呼称した。また、東西軸南北軸交点の北東杭の名称をとってグリッド名とした。

（２）調査の経過

調査開始に先立つ、松谷中峰遺跡調査前航空写真撮影および地形測量・基準点測量については国土交通省が行い、別所中峯遺跡については業者に委託した。別所中峯遺跡の航空写真撮影は７月30日、地形測量は７月29日～８月１日に行った。

松谷中峰遺跡　調査はＢ区より開始し、Ｂ区より出た排土をＡ区に仮置きし、Ｂ区の調査終了後にＡ区排土と共にＢ区を埋め戻し、Ａ区の調査を行った。Ａ区内の農道については、仮設道を設置した後撤去して調査した。排土の仮置き、埋め戻し作業は国土交通省が行った。

表土剥ぎ後に調査区内の基準杭（10ｍメッシュ）の設定を業者に委託して行った。

調査は、４月14日より重機による表土剥ぎ作業を行った。人力での発掘調査は、Ｂ区が４月18日から５月23日、Ａ区及び西トレンチが６月２日から６月30日の間で行った。

Ｂ区は、東側半分を果樹園造成のため大幅に削平されており、かろうじて西側部分に一部古墳時代中期に属すると考えられる竪穴建物跡２棟をはじめとする遺構が残存していた。東半部を削り、西側谷部を埋めていた客土中より古墳時代中期を中心とする遺物が出土していることから、本来は東半部にもこの時期を中心とする遺構が存在していたことが想像される。

Ａ区は、その立地上なんらかの遺構が存在するのではないかと予想されたが、遺構は検出されず、表土剥ぎ及び精査中に出土した遺物は土器細片数点と、石器１点のみであった。

Ａ区の調査結果を受け、平成16年度に調査予定であった本年度調査区の西側にあたる区域について南北に３ｍ×70ｍのトレンチ（西トレンチ）を設定し、調査を行ったところ、遺構・遺物ともに認められなかった。これらの調査結果から、来年度調査予定地については、県文化課との協議の結果、発掘調査の必要はないという判断に至った。

〈調査日誌抄（平成15年度）〉

松谷中峯遺跡

4/15～5/2	Ｂ区　重機による表土剥ぎ開始（国土交通省）
4/30	Ｂ区　遺構検出作業開始
5/6	SI１検出
5/8	発掘調査方針協議（県文化課　財団センター）
5/23	Ｂ区　調査終了
5/26～28	Ａ区　重機による表土剥ぎ開始（国土交通省）
6/2	Ａ区　精査開始　来年度調査予定地に西トレンチ設定
6/6	Ａ区・西トレンチ精査ともに遺構無し
6/23	Ａ区清掃
6/30	調査終了

別所中峯遺跡

7/29～8/1	調査前測量（業者委託）
7/30	調査前空撮（業者委託）
8/19～22	重機による表土剥ぎ
8/22	調査区北側の精査開始
8/28	SK１検出
9/3	SK３検出
9/5	SI１，SI２検出
10/15	森内秀造氏（兵庫県教育委員会）現地指導
10/22	別所中峯遺跡記者発表（八橋第８・９遺跡と合同）
10/24	調査後空撮（業者委託）
10/25	別所中峯遺跡現地説明会（八橋第８・９遺跡と合同）
10/28～29	調査後地形測量（業者委託）
10/31	調査終了

別所中峯遺跡　調査は表土剥ぎ前に試掘調査の入っていなかった調査区南側に確認トレンチを入れることから開始した。調査区南半部は現代の梨栽培による撹乱が激しく、遺構も認められなかったが、須恵器や土師器片が出土し、周囲に遺構の存在が予想されるような状況であった。調査区南側確認調査の後、８月19日～22日表土剥ぎを行い、８月22日より人力での遺構検出作業を開始した。排土は調査区西側にストックヤードを設けて仮置きの後、場外に搬出した。

遺構検出の結果、全体的に遺構密度は高くはなかったが、古墳時代初頭の儀礼跡や、県内では類例の少ない製炭土坑群などを検出し、貴重な成果を得ることが出来た。10月25日には八橋第８・９遺跡と合同の現地説明会を開催し、80人近くの見学者が訪れた。10月24日に調査後航空撮影、10月28日～29日に調査後地形測量を業者委託により行い。10月31日に現地での調査を終了した。（大野）

第３節　調査体制

調査は下記の体制で実施した。

平成15年度

○ 調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	有田　博允
常務理事	川口　一彦（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長	下田　弘人
埋蔵文化財センター	
所長	田中　弘道（県埋蔵文化財センター所長）
次長	竹内　茂
	加藤　隆昭
調査課　課長（兼）	加藤　隆昭
企画調整班　班長	山桝　雅美
文化財主事	下江　健太
庶務課　課長（兼）	竹内　茂
主任事務職員	矢部　順子
事務職員	田中　陽子　大川　秋子　植田　恵子（９月退職）
	谷垣　真寿美　小谷　有里
事務補助員	山根　美代（11月採用）

○ 調査担当　東伯調査事務所

所長	佐治　孝弐
班長	牧本　哲雄（笠見第３遺跡担当）
文化財主事	鍋倉　和行（別所中峯遺跡担当）
	大野　哲二（松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡担当）
調査員	福井　流星（松谷中峰遺跡担当）
事務補助員	大田　直子

○ 調査協力　国土交通省中国地方建設局倉吉河川国道事務所、赤碕町、赤碕町教育委員会

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

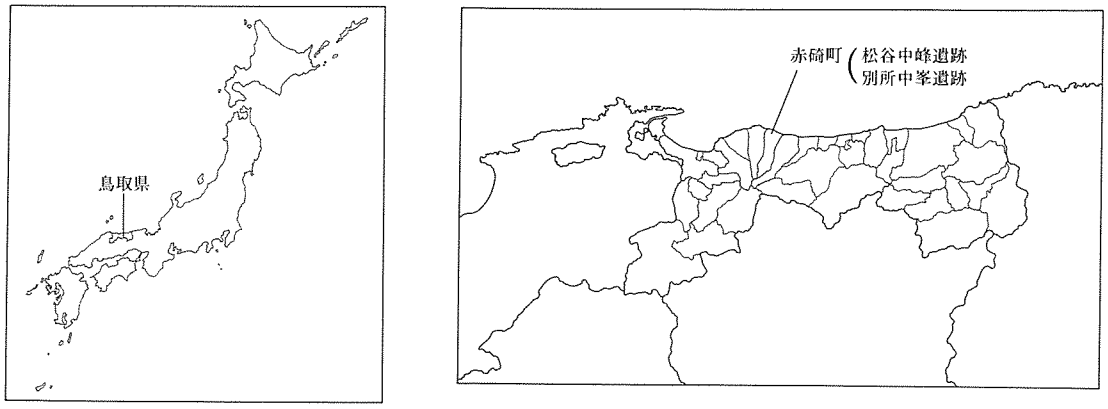
今回、調査が行われた赤碕町は、鳥取県中部（東伯耆）の西側に位置する。北は日本海を望み、南は中国山地を遠望することができる。東は東伯町、西は中山町に挟まれ、矢筈ヶ山を扇頂として北に広がる細長い扇状形を示す。北は日本海を望み、南部は船上山をはじめ、勝田ヶ山、甲ヶ山、矢筈ヶ山などの山岳地形を形成し、山麓台地、火山灰に覆われた丘陵地、北流する勝田川や矢筈川などで形成された河岸段丘・沖積平野が続き、海岸地帯は大山裾野が海に落ち込んだ地形をなしている。

本町の総面積は57.27km²で、人口は8,480人（平成14年２月１日現在）である。産業は農業と漁業が中心で、農業においては、稲作、果樹栽培が主に行われ、中でも二十世紀梨の栽培が盛んであり、丘陵部のほとんどが梨畑として古くから利用されている。平野部は稲作を中心とした田畑が広がる他、山林資源も豊富である。漁業においては、沿岸漁場として県内屈指の水揚げも誇っている赤碕港を有しており、古くから盛んに漁業が行われてきた土地である。（鍋倉）

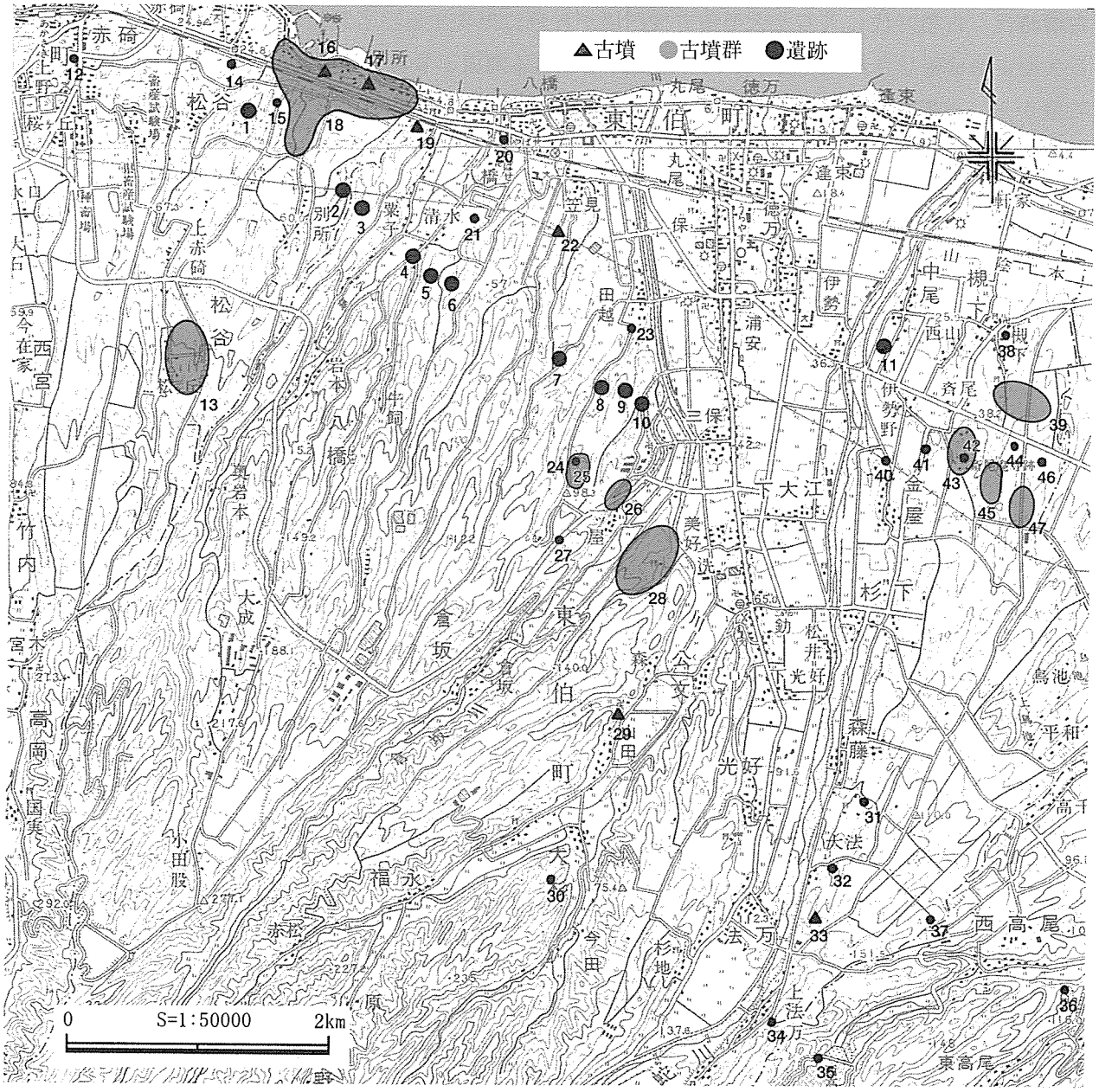
第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代　旧石器時代、この地域では赤碕町松ヶ丘、東伯町槻下で尖頭器が数点見つかっているのみで、鳥取県内でも、遺構は発見されていない。縄文時代の遺構も、後期に入るまで明確なものは少ないが、低丘陵上および平野部において、人々の活動痕跡が確認されている。早～前期では西高尾谷奥遺跡（35）で竪穴状遺構が確認されているほか、松ヶ丘遺跡（13）、森藤第２遺跡（31）などで土器が出土している。中期では、井図地頭遺跡（10）など丘陵上の遺跡で土器が出土している。後期になると、丘陵部に定住的な集落が見られるようになる。特に森藤第２遺跡では中央に石囲い炉をもつ竪穴住居が検出されている。その他、この時代のものと考えられる落し穴が福留遺跡（12）ほか多くの遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

弥生時代　弥生時代に入り本格的に稲作が始められ、それを機軸とした文化・社会が形成されたと考えられる。しかし、県中部では、現時点では稲作に関る遺構は発見されていない。集落遺跡は、中期以降加勢蛇川右岸の平野部と丘陵上で確認されている。特に中期後葉から古墳時代初頭にかけて遺跡数が大幅に増加する。東伯町水溜り・駕籠据場遺跡（46）、大峰遺跡（37）、田越遺跡群（23・24・25）、井図地中ソネ遺跡（9）、笠見第３遺跡（７）、三林遺跡（8）、久蔵峰北遺跡（6）、福留遺跡などで集落が営まれている。笠見第３遺跡では集落内に後期の玉作り工房跡が検出されており、緑色凝灰岩製の管玉未製品や剥片が出土している。墓域については、前期に大栄町青木第１遺跡・後ろ谷遺



第２図　遺跡位置図



１.松谷中峰遺跡 ２.別所中峯遺跡 ３.八橋第８・９遺跡 ４.岩本遺跡 ５.蝮谷遺跡 ６.久蔵峰北遺跡 ７.笠見第３遺跡 ８.三林遺跡（旧田越第４遺跡） ９.井図地中ソネ遺跡 10.井図地頭遺跡 11.中尾第１遺跡 12.福留遺跡 13.松ヶ丘遺跡 14.墓ノ上遺跡 15.松谷遺跡 16.笠取塚古墳 17.別所２号墳 18.別所古墳群 20.八橋城跡 21.八橋銅鐸出土地 22.笠見１号墳 23.田越遺跡群 24.田越第２遺跡 25.田越第３遺跡（銅剣出土地） 26三保古墳群 27.三保遺跡群 28.竜ヶ崎古墳群 29.山田１・２号古墳 30.妙見山城跡 31.森藤遺跡群 32.古瓦出土地（大法廃寺跡） 33.大法古墳群 34.法万経塚 35.西高尾谷奥遺跡 36.西高尾経塚 37.大峰遺跡 38.槻下豪族居館 39.槻下古墳群 40.金屋経塚 41.伊勢野遺跡郡 42.斎尾廃寺遺跡 43.斎尾古墳群 44.大高野遺跡 45.塚本古墳群 46.水溜り・駕籠据場遺跡 47.大高野古墳群

第３図　周辺遺跡分布図

跡で土壙墓が見つかっており、中期以降赤碕町墓ノ上遺跡（14）・別所女夫岩峯遺跡で木棺墓が検出されている。井図地中ソネ遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の区画溝をもつ土壙墓群が見つかっている。その他に、弥生時代の祭祀を特徴づける銅鐸が、県中部では６遺跡で計７口見つかっている。東伯町八橋では南方丘陵上（21）で銅鐸が１口見つかっている。また、東伯町田越の丘陵上（25）で、正確な出土状況は明らかではないが、中細形銅剣が４口、東伯町久蔵峰で銅矛が１口出土している。八橋を中心とする地域は島根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成である銅剣・銅矛・銅鐸がそろって出土していることとなり、その共通性が注意される。

古墳時代　古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所１号墳（笠取塚古墳）（16）は、墳形等の特徴から、前期に遡る可能性がある。中期から後期になって、別所２号墳（17）・八橋狐塚古墳（19）・笠見１号墳（22）・竜ヶ崎３号墳（28）など、前方後円墳の築造が見られる。これらは大山から日本海に延びる山麓の丘陵北縁の、日本海を見下ろす要所に築造されている。中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになる。中期以降の群集墳としては、大栄町妻波古墳群・瀬戸古墳群・西穂波古墳群、赤碕町出上岩屋古墳・別所古墳群（18）・箆津古墳群・帆立貝式古墳の光１号墳などがある。また、後期以降従来の竪穴系の埋葬施設に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法３号墳（33）や三保６号墳（26）、大栄町上種東３号墳、上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性があり、槻下古墳群（39）・塚本古墳群（45）・大高野古墳群（47）・斎尾古墳群（43）、などで後続する石室形態も同じ系譜上のものであることから、加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。山田１号墳（29）や出上岩屋古墳は切石積石室で、終末期の様相を示す。この時代の集落は、東伯町三保遺跡（27）、井図地中ソネ遺跡、笠見第３遺跡、八橋第８・９遺跡、赤碕町太一垣遺跡・松谷遺跡（15）・別所第３遺跡など、丘陵上に営まれている。

古代　日本で最初に仏教伽藍が建立されてから約半世紀後の７世紀後半頃、山陰地方では仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22ヵ所の古代寺院が見つかっており、中でも初期の仏教文化の姿を最もよく残しているといわれる斎尾廃寺（42）は、県内では珍しい法隆寺式の伽藍配置を採っており、山陰唯一の国特別史跡に指定されている。ここからは、塑像片・仏頭・鴟尾・鬼瓦などが出土している他、軒丸瓦に紀寺式の、軒平瓦に法隆寺式系統の瓦を創建時には採用していることがわかっており、畿内と関係の深い有力豪族が当地域で勢力を持っていたと推察される。斎尾廃寺東方には、正倉（郷倉）と考えられる総柱礎石建物群が検出された大高野遺跡（44）があり、さらに郡衙所在地もその周辺に比定されている。伊勢野遺跡群（41）では、掘立柱建物を中心とする集落が見つかっており、その南方には古瓦出土地（32）がある。当地域は伯耆国八橋郡に属し、当郡の中心地であったと考えられる。平安時代末期の遺構として、金屋（40）と法万（34）に経塚があり、金屋と西高尾（36）では銅経筒が出土している。また、井図地頭遺跡において「コ」の字状の溝に囲まれた方形区画遺構が見つかっており、居館跡であった可能性が指摘されている。

中世・近世　鎌倉時代に入ると、名田を多く集めた有力名主の中には荘園内に孤立した荘宅を構えるなど、武士的な性格を持つ豪士が出現する。東伯町槻下（38）には、周囲に高さ２ｍの土塁が築かれた館跡があり、『伯耆民談記』には岩野弾正坊の居城であったと記述されている。また、赤碕町海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期の作と推定される宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の赤碕塔がある。現在町赤碕町内で６基確認されている。

ＪＲ山陰線八橋駅北側の丘陵上には、尼子・毛利氏の影響下、西伯耆から東伯耆方面の経営拠点となった八橋城跡（20）がある。また、東伯町大杉には、南条氏の出城である妙見山城跡（30）がある。赤碕町箆津城（槇城）は、1584～1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城・大仏山城・山川城跡が知られている。築城年代は不明であるが、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城（東郷町）攻撃に関与した城と考えられている。

江戸時代には東伯町逢束に伯耆街道の宿駅や、鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」が置かれていた。

（淺田康行、岩井美枝、原あづさ、福井流星）

第３章　松谷中峰遺跡の調査

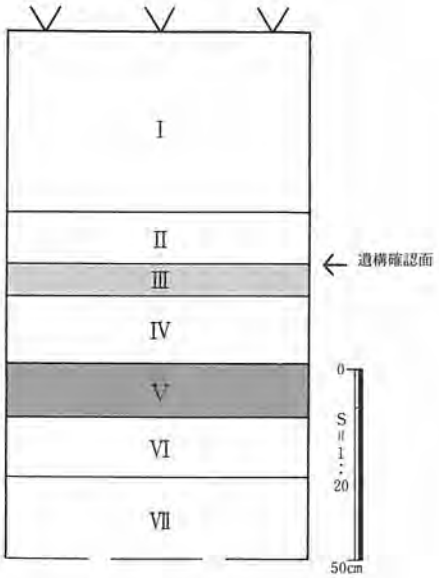
第１節　立地と層序

松谷中峰遺跡は、赤碕町の北西部、北に赤崎港を一望できる丘陵上に立地している。この丘陵は中小河川により尾根状に分断された大山裾野よりのびる台地の先端に近い部分にあたり、調査区より約１km北上すると日本海に至る。

調査区は標高約42～38mで、中央にはしる農道に沿った谷と、谷の両側の丘陵部を含んだ地形であり、果樹園と畑地として利用されていた。

調査区内のうちＢ区は果樹園造園のため大きく地形が改変されており、調査区内でも土の堆積状況は一様ではなかったが、基本層序として改変を受けていない部分の堆積状況を第４図に示した。

表土及びその漸移層であるⅠ・Ⅱ層が30～60cm堆積した下に遺構確認面である第Ⅲ層のソフトローム層がある。検出された竪穴建物跡などはこの層を床面にしている状況であったので、当時の生活面はこの層から更に１ｍ程高い位置にあったと想定される。



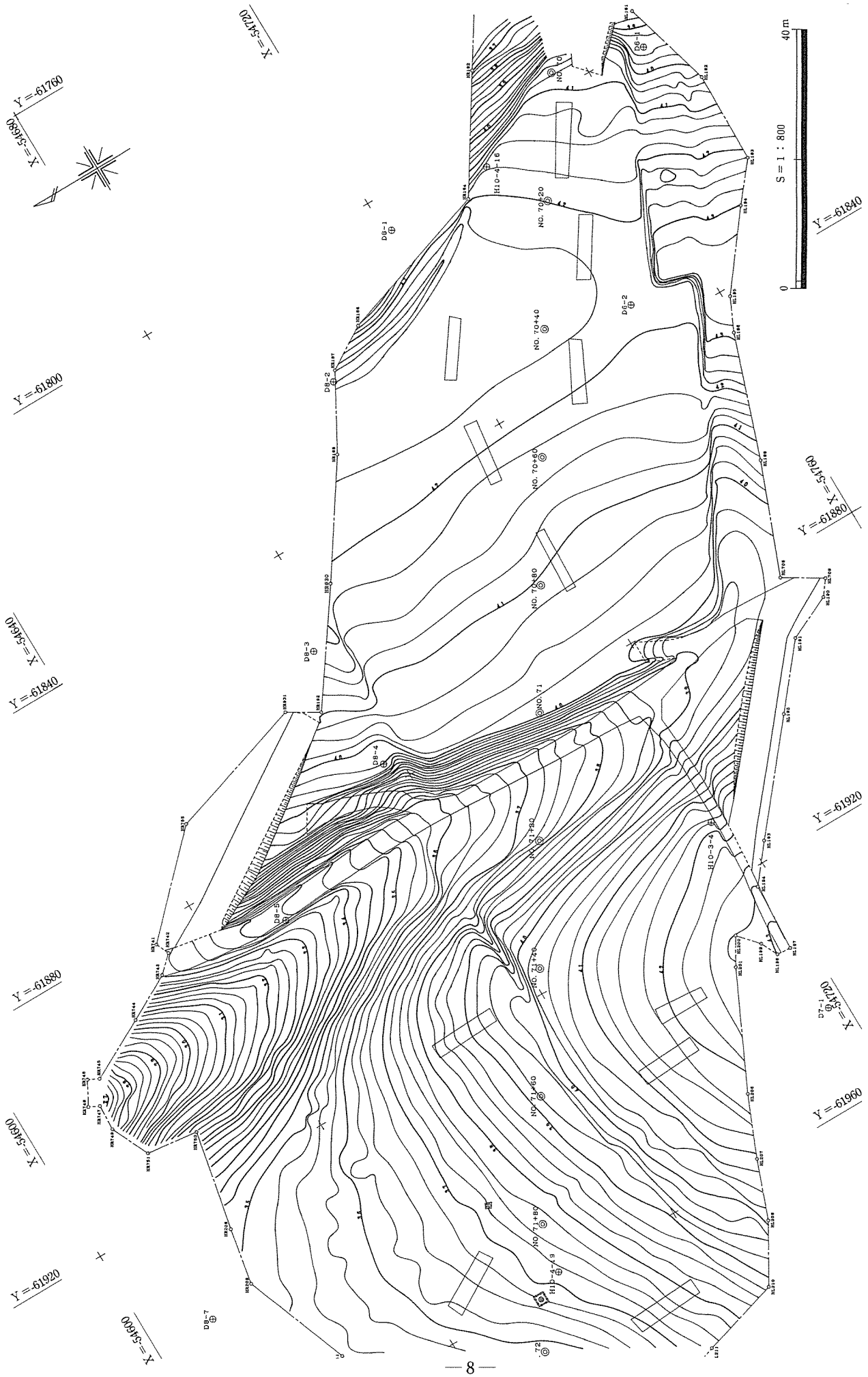
Ⅰ　暗褐色土（表土及び造成土）
Ⅱ　褐色土（締まり中、粘性中）
Ⅲ　黄褐色土（ソフトローム）
Ⅳ　黄褐色土（青灰色ロームブロック：上のホーキ層起源（径１～２cm）少量含む）
Ⅴ　明黄褐色土（ＡＴ：姶良火山灰層　21,000～22,000Ｙ.Ｂ.Ｐ）
Ⅵ　白色土（粘性強、締まり強）
Ⅶ　淡赤褐色土（粘性強、締まり強）

第４図　基本層序柱状図

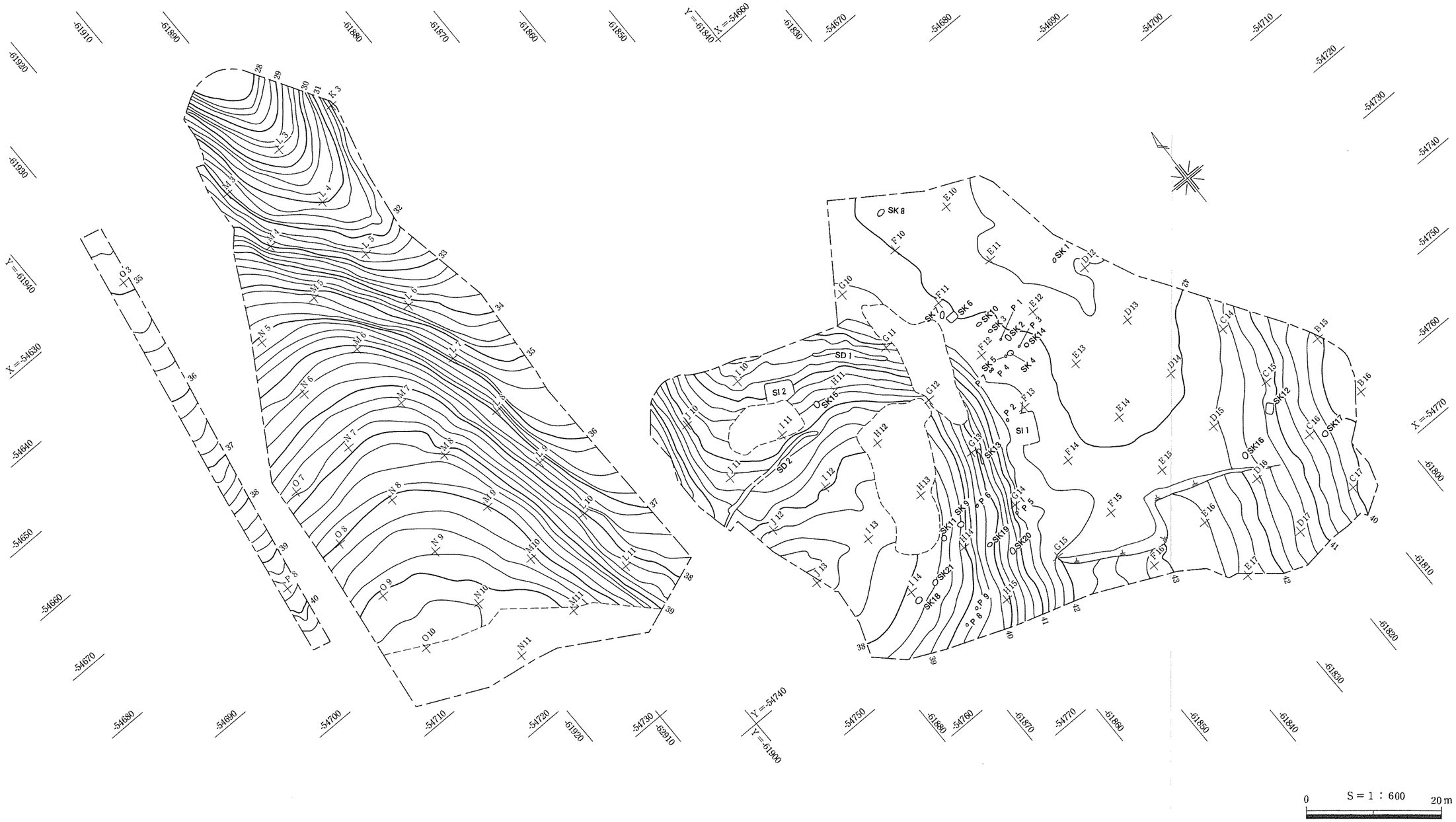
遺構確認面下はいわゆる「大山上部火山灰」とよばれる層で、表土下約70cmに大山起源の火山灰層である「上のホーキ火山灰層」を一部含む層（第Ⅳ層）が確認され、約90cm下には約22,000年前の鍵層として著名な姶良火山灰層（AT層：第Ⅴ層）が約15cmの厚さで堆積している状況が確認できたが、これらの層中に遺構・遺物は認められなかった。（大野）

写真１　重機による表土剥ぎ

写真２　人力による精査



第５図　松谷中峰遺跡調査前測量図

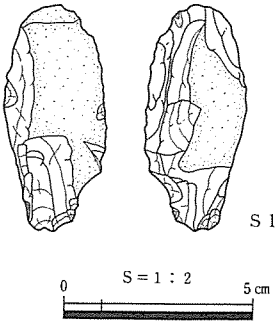


第６図　松谷中峰遺跡調査後測量図

第２節　A区の調査（第７図、第１表、PL.７・９）

Ａ区は、果樹園および畑地として利用されており、西側の丘陵部と、その東にある緩やかな谷部からなる。梨栽培等による撹乱を受けているものの、基本層序第Ⅲ層のソフトロームがよく残り、遺構が存在するならば確認しうる状況であったといえる。

しかし、遺構は確認できなかった。また、遺物に関しても、表土剥ぎ作業中及び精査中に土器細片数点と、剥片石器１点（Ｓ１）が表土や撹乱土に混ざって出土したのみであった。（大野）



第７図　A区出土石器

第１表　A地区出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 [g]	石　材	備　考
S１	A区	第７図 PL.9	剥　片		6	2.8	1.6	23.6	石英脈石	

第３節　B区の調査

（１）概要

Ｂ区は果樹園として利用されており、ほぼ平坦な地形であった。しかし、表土除去後にＢ区西側はゴミや伐木を多量に含む土で埋め立てられていることが分かり、これらを除去すると深さ３ｍ程の谷が出現した。また、谷の底にはさらに深い穴が数ヶ所掘られており、その中に多量の伐木が廃棄されていた。

Ｂ区東側では、20～30cm表土直下で、遺構確認面より４層下の層にあたる基本層序第Ⅶ層の淡赤褐色土が露出し、大幅な削平を受けている状況が確認できた。これらの状況は、Ｂ区東側を削った土によって西側の谷を埋めるという（おそらく果樹園を造るために）大規模な造成が行われたことを示すものである。

以上のような状況であるので、遺構はほぼ残存していないのではないかと予想されたが、竪穴建物跡２棟、土坑21基、溝状遺構２条、ピット８基を検出した。（大野）

（２）竪穴建物跡

Ｂ区からは、２棟の竪穴建物跡が検出された。ともに基本層序第Ⅲ層まで掘り込み、床面としているものである。上述したように、Ｂ区の大部分が果樹園造成のため大幅な削平をうけており、そのため第Ⅲ層が残存している箇所は稀であった。確認できた竪穴建物跡は、この残存している部分にかろうじてその痕跡を確認できたものであり、造成前はさらに多くの遺構が存在していたであろうことを想像させるものである。（大野）

SI１（第８・９図、第２表、PL.２・８）

Ｆ13グリッド　北東側、標高約41.5～41.3ｍのＢ区東側平坦面の西端に位置する。北東側の過半は造成により削平されていたが、傾斜変換点前の平坦面に基本層序第Ⅲ層であるソフトローム層がかろうじて残存しており、周壁溝の一部とピットが確認できた。

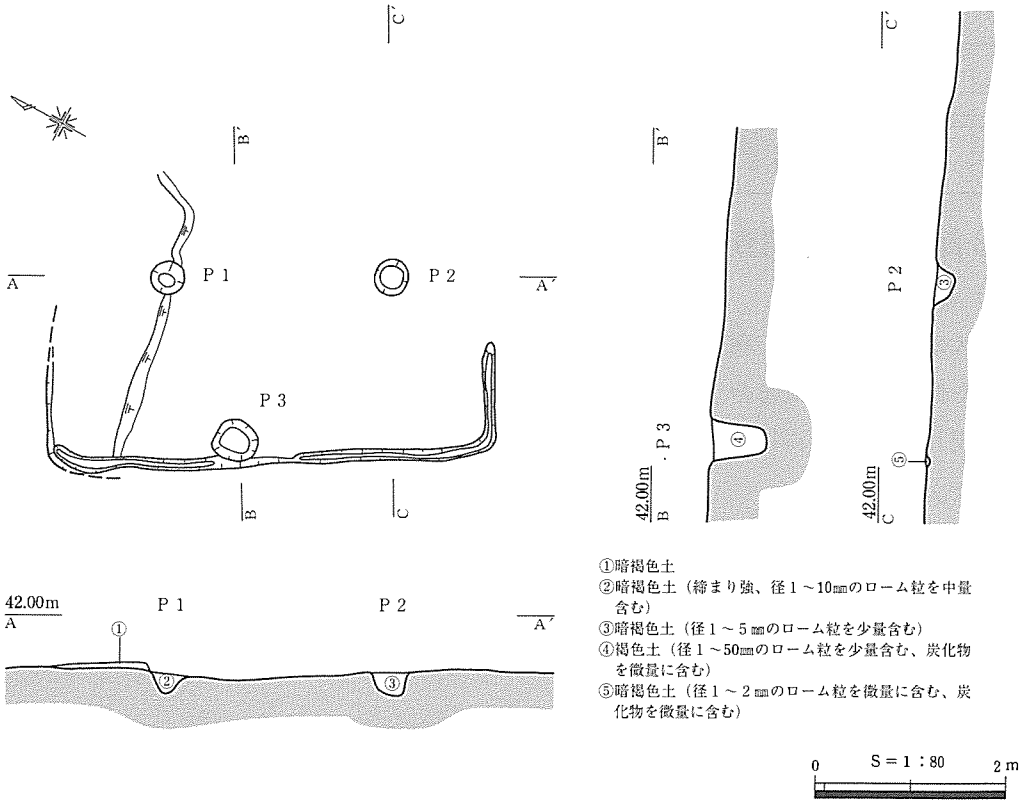
周壁溝は上述のように北東側の過半が削平されて残っていないものの、断面Ｕ字状、深さ約３cmで、長軸4.7ｍ、短軸残存部1.1ｍの長さで検出され、床面が長方形プランを呈していたものと分かる。検出面からの深さは最大で約10cm弱で、埋土はほとんど残っていなかった。

ピットは３基検出され、このうち主柱穴と考えられるのはＰ１（34×35－21）cm、Ｐ２（37×35－23）cmで、北東側にもピットは検出されなかったことから、２本柱の竪穴建物であったと考えられる。また、壁周溝の残存している南西辺中央部から特殊ピットと考えられるＰ３（52×44－57）cmが検出され、Ｐ３埋土中より土器１・２が出土した。

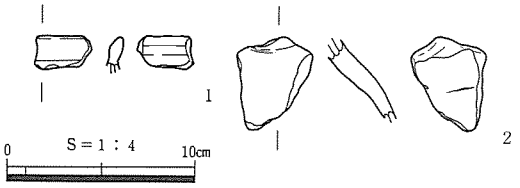
このうち小型甕の口縁部と考えられる１は口縁部下端の突出がほぼ見られなくなる段階のものであり、天神川編年Ⅶ～Ⅸ期に相当するものであることから、この遺構の所属年代として、古墳時代中期後半の時期が想定される。（大野）

SI２（第10図、PL.２）Ｈ10グリッドのほぼ中央部、標高約40.2～39.9ｍのＢ区西側斜面の北側に位置する。Ｂ区西側の斜面部には、本遺構の南側に果樹園造成時に伐木を埋めた穴が掘られており、南半部は残存していなかった。

残存部も、最も残りのよい部分で床面まで約５cmと、埋土はほぼ削平されていた。かろうじて断面Ｕ字状深さ約５cmの周壁溝が残存していたことから、１辺4.3ｍ前後の方形プランであったことがわかった。



第８図　SI１



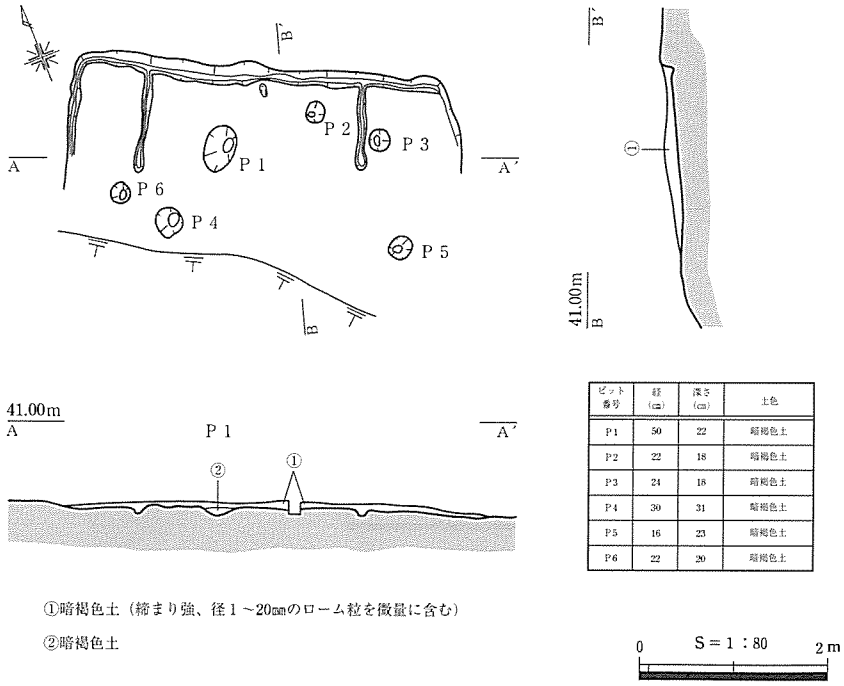
第９図　SI１出土土器

床面から、ピットはＰ１（長径47×短径32－深さ22）cm、Ｐ２（22×18－18）cm、Ｐ３（24×22－18）cm、Ｐ４（30×28－31）cm、Ｐ５（26×24－23）cm、Ｐ６（19×17－20）cmの６基検出できたが、主柱穴と考えられるものは検出できなかった。

他に床面には、断面Ｕ字状、深さ約５cmの床溝が２条検出された。これは、北東側周壁溝に直角に、

第２表　SI１出土土器観察表

No.	遺構・地区層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
1	SI１埋土中	土師器甕？口縁部	第９図 PL.８－１	器高：△1.7cm	口縁部１／８以下	内外面：ナデ	橙	密	
2	SI１埋土中	土師器甕肩部	第９図 PL.８－１	器高：△5.0cm	肩部１／８以下	外面一部ハケが残る、他は摩滅により調整不明	浅黄橙色	密、1.5㎜の石英中量含む	



ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	土色
P1	50	22	暗褐色土
P2	22	18	暗褐色土
P3	24	18	暗褐色土
P4	30	31	暗褐色土
P5	16	23	暗褐色土
P6	22	20	暗褐色土

第10図　SI 2

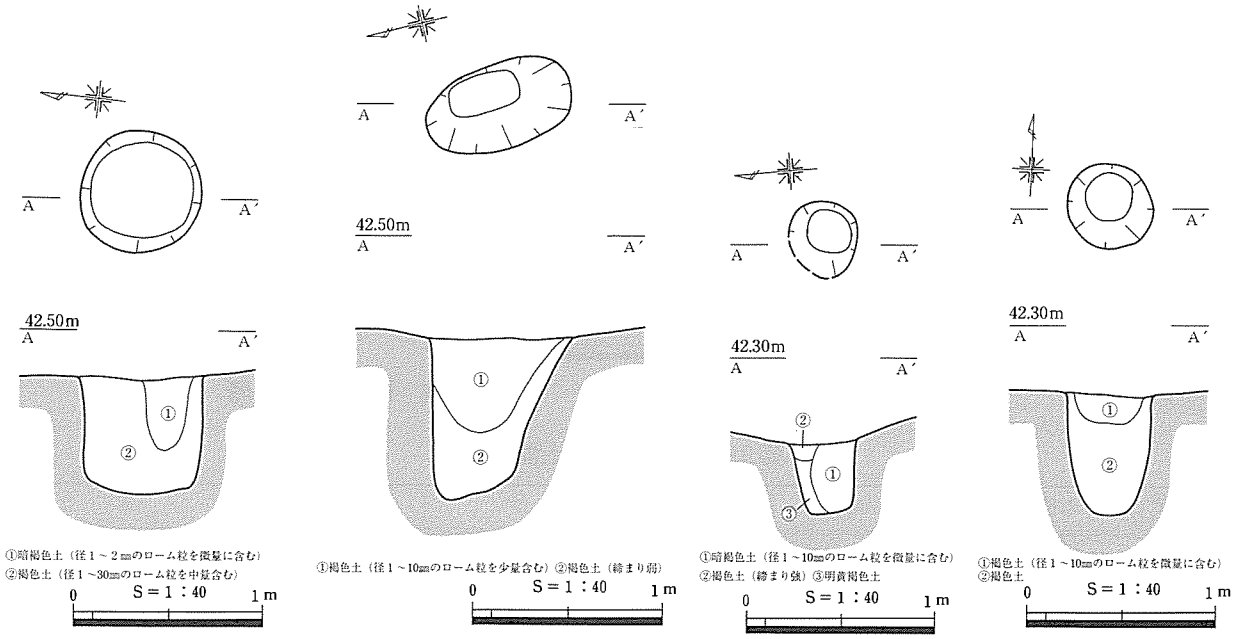
約2.4m間隔で平行に延びており、それぞれの長さは東側が約0.85m、西側は約1.0mである。仕切り溝の一種と考えられる。

出土遺物としては、床面で小礫が出土したほかに、土器片が数点出土しているが、すべて小片で、図化に耐えうるものは出土していない。よって出土遺物からはこの遺構の時期を判断できなかったが、方形プランであることや、SI 1との関係性、また、後述する造成土に混入していた遺構外出土遺物がほぼ古墳時代中期を中心とした時期のものであることなどを考え合わせると、SI 2もSI 1と同じく古墳時代中期である可能性が高いと判断される。（大野）

（3）土坑

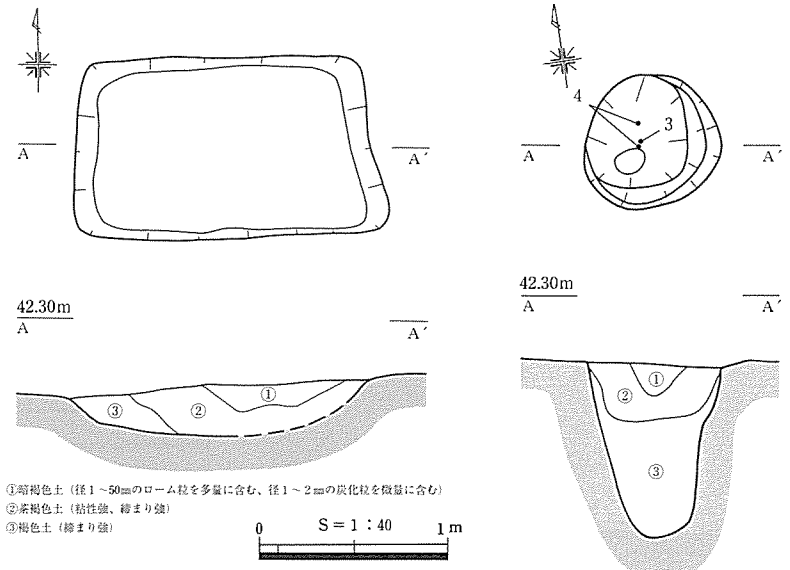
土坑は21基確認できた。これらの性格・時期ともに不明のものが大半を占めるが、検出されている位置を見ると、東側斜面およびE11グリッドからE12グリッドにかけての中央部に集中している傾向が認められる。これらの地区は基本層序第Ⅲ層のソフトロームが比較的残存している区域であり、削平以前には、B区東側には多くの遺構が存在していた可能性を示す状況であると理解できる。

（大野）



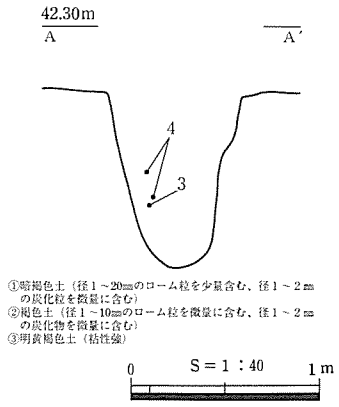
第11図　SK 1　　第12図　SK 2　　第13図　SK 3　　第14図　SK 5

SK１（第11図、PL.３）H11グリッドの中央よりやや南より、標高約42.3～42.2mのＢ区東側平坦面の北東側に位置する。長径0.68m、短径0.64mの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.60mを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。　（大野）



第15図　SK６

SK２（第12図、PL.３）E12グリッドの北端、標高約42.0～41.9mのＢ区東側平坦面の北西側、ＳＫ３の南東側、ＳＫ４の北東側に位置する。長径0.79m、短径0.82mの楕円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.82mを測る。遺物は土器２点が出土しているが、図化に耐えるものではなかった。この土坑の時期・性格とも不明である。　（鍋倉）

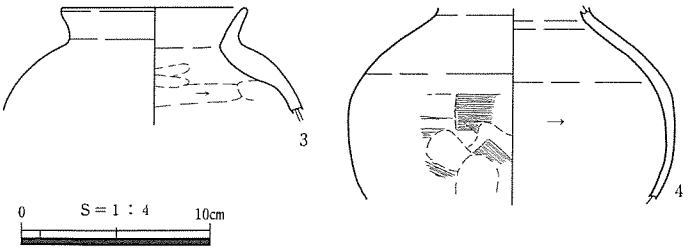


第16図　SK４

SK３（第13図、PL.３）E11グリッドの南西側、標高約41.9～41.8mのＢ区東側平坦面の北西、SK10の南東側に位置する。長径0.42m、短径0.36mの円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.38mを測る。遺物は埋土中より土器片が出土しているが、図化できなかった。この土坑の時期・性格とも不明である。　（大野）

SK４（第16・17図、第３表、PL.３・８）E12グリッドの北西側、標高約42.0～41.9mのＢ区東側平坦面の北西側、SK５の東側に隣接する。長径0.75m、短径0.72mの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.89mを測る。遺物は埋土中から出土し、２点図化できた（３・４）。３は外反する単純口縁甕で、天神川編年Ⅶ期以降の形態であると思われる。よってこの土坑は、古墳時代中期以降のものであると判断できる。

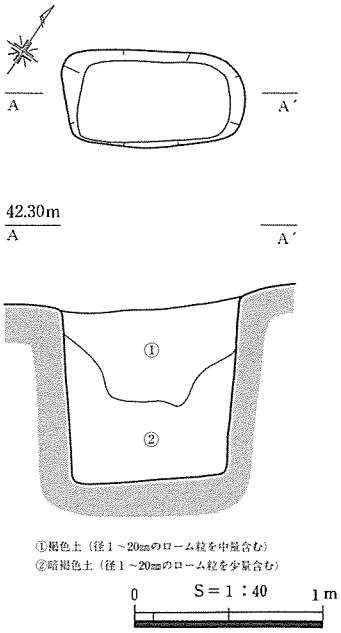
この土坑の性格は不明であるが、このSK４周辺にピットや土坑が集中することから、削平前の竪穴建物跡の痕跡で、これら土坑やピットは、柱穴や特殊ピットの痕跡であった可能性もある。　（大野）



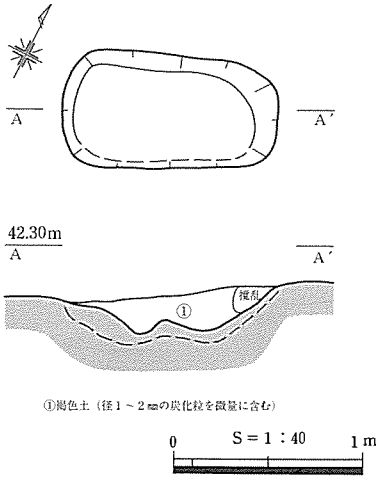
第17図　SK４出土土器

第３表　SK４出土土器観察表

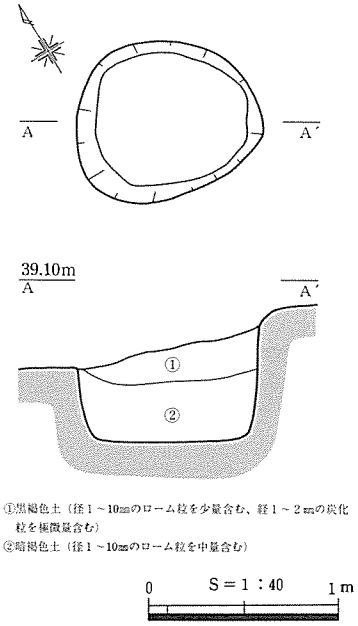
No.	遺構・地区層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
3	SK４埋土中	土師器甕 口縁～肩部	第17図 PL.８－１	器高:△9.8cm 口径:※5.6cm	口縁部 1／5	内面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	密、雲母中量含む	
4	SK４埋土中	土師器甕？ 頸部～胴部	第17図 PL.８－１	器高:△10.2cm	肩部 1／3	外面：頸部～肩部ナデ、胴部ハケ→ナデ 内面：頸部～肩部ナデ、胴部ケズリ	橙色	密、雲母少量含む	



第18図　SK７

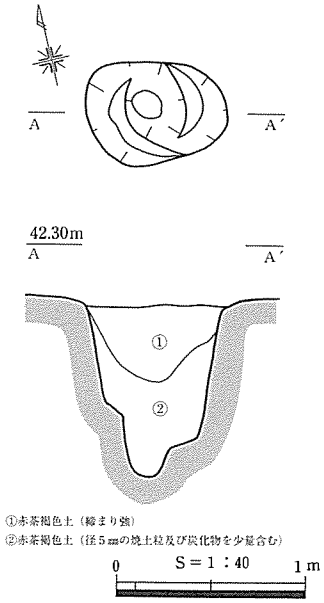


第19図　SK８

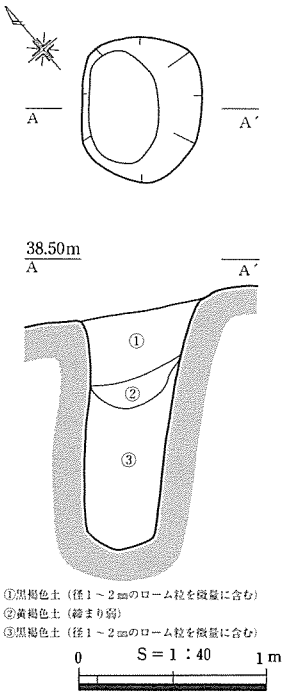


第20図　SK９

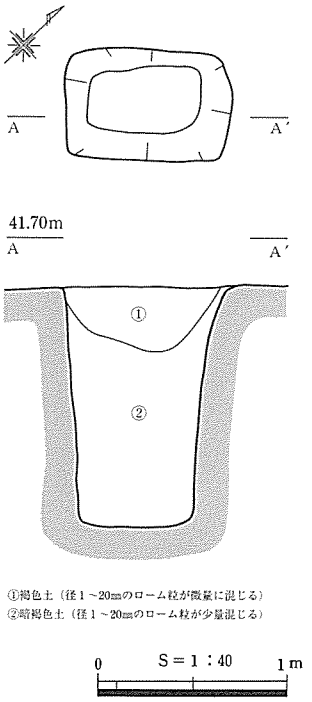
SK５（第14図、PL.３）E12グリッドの北西側、標高約42.0～41.9mのＢ区東側平坦面の北西、SK４の西側に隣接する。長径0.47m、短径0.44mの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.64mを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。（鍋倉）



第21図　SK10



第22図　SK11



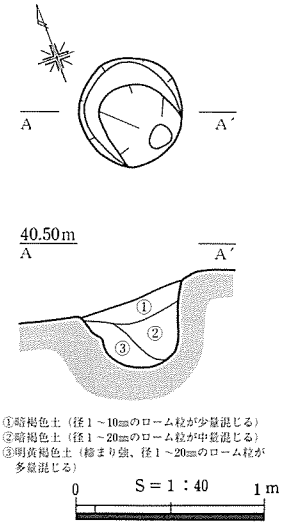
第23図　SK12

SK６（第15図、PL.３）E11グリッドの北西端、標高約42.0～41.9mのＢ区東側平坦部の北西、SK７の南側に隣接する。長軸1.54m、短軸0.94mの方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.22mを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

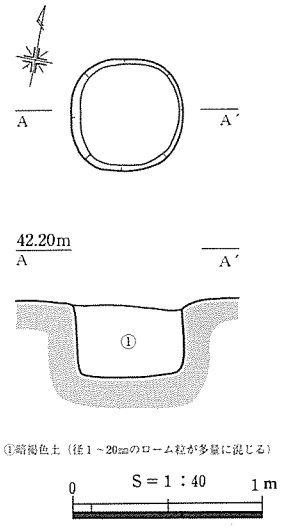
SK７（第18図、PL.３）Ｆ11のグリッド北東端、標高約41.9mのＢ区東側平坦面の北西側、SK６の北側に隣接し位置する。長軸0.96m、短軸0.52mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.96mを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

SK８（第19図、PL.４）Ｅ９のグリッド西端、標高約42.1～42.0mのＢ区東側平坦部北端に位置する。長軸1.13m、短軸0.60mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.29mを測る。

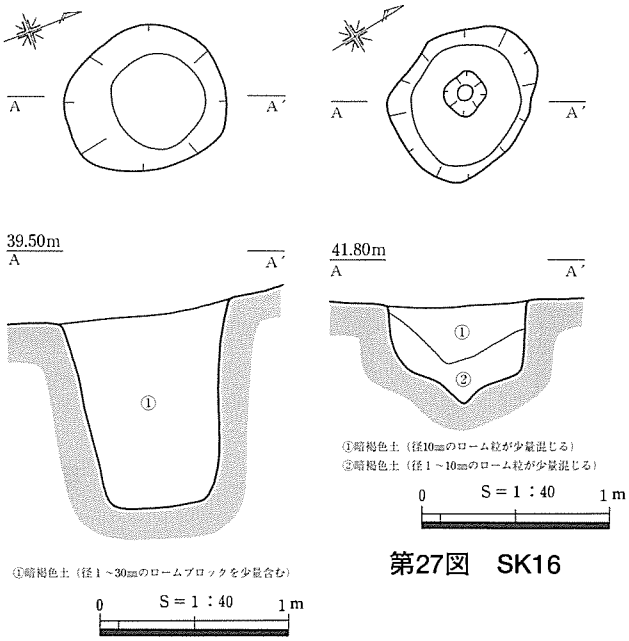
遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）



第24図　SK13

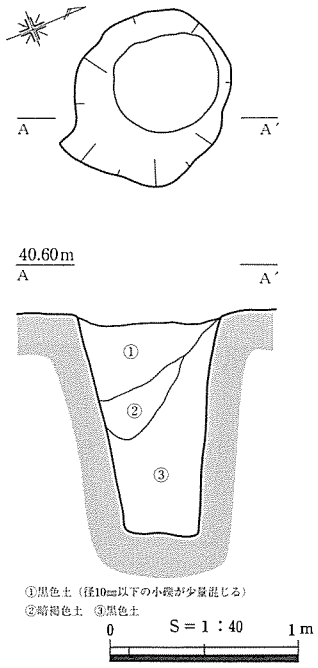


第25図　SK14



第27図　SK16

第26図　SK15



第28図　SK17

SK９（第20図、PL.４）Ｇ13のグリッド南西側、標高約38.9～38.6ｍのＢ区西側斜面の南東側、SK11の東側に位置する。長軸0.98ｍ、短軸0.84ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.50ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

SK10（第21図、PL.４）E11グリッドの南西側、標高約42.0～41.9ｍのＢ区東側平坦面の北西、SK３の北西側に位置する。長径0.98ｍ、短径0.54ｍの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.84ｍを測る。底面中心部に、径約18㎝、深さ約24㎝のピットを持つ。

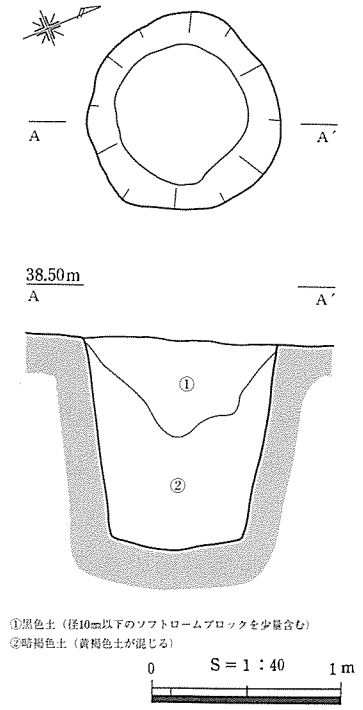
遺物は出土しておらず時期不明であるが、底部中央に底面ピットを持つというその形態的特徴から、落とし穴としての機能をもつものと考えられる。（大野）

SK11（第22図、PL.４）H13のグリッド南東側、標高約38.3～38.1ｍのＢ区西側斜面の南東、SK９の西側に位置する。長径0.77ｍ、短径0.64ｍの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で1.09ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

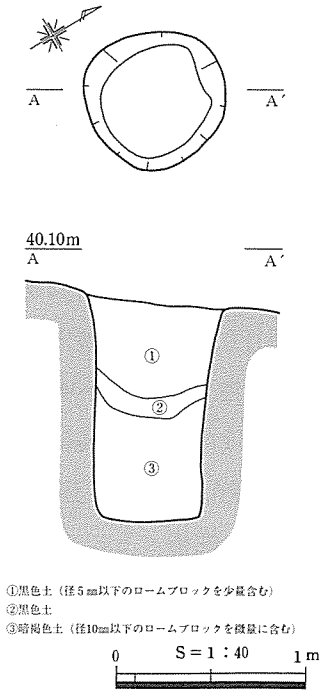
SK12（第23図、PL.４）Ｃ15グリッド北側、標高約41.4～41.5ｍのＢ区東端斜面の北側で、SK16の北東側に位置する。長軸0.88ｍ、短軸0.58ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.72ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

SK13（第24図、PL.４）Ｆ13のグリッド北西端、標高約40.3～40.0ｍのＢ区西側斜面の東、SI１の西側に位置する。長径0.88ｍ、短径0.58ｍの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.44ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

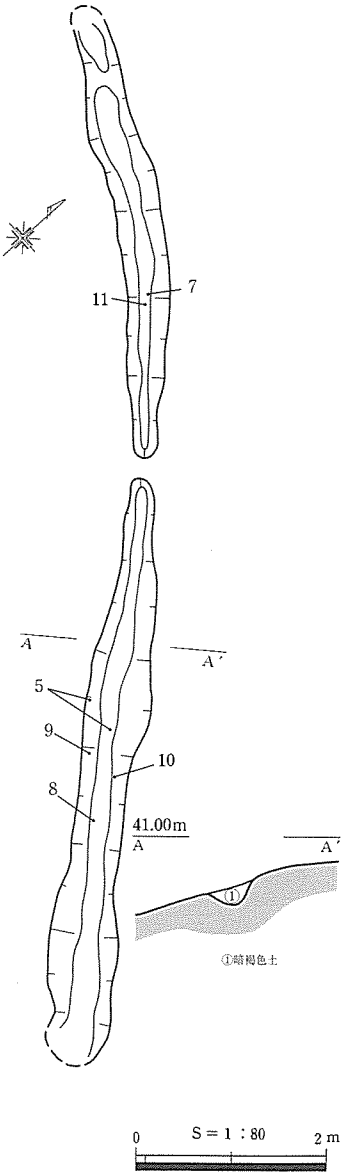
SK14（第25図、PL.４）Ｅ12グリッド北側、標高約41.9ｍのＢ区東側平坦面の北西側で、SK４の東側に位置する。長軸0.58ｍ、短軸0.54ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.36ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）



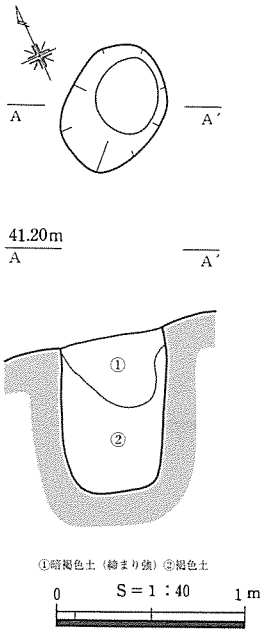
第29図　SK18



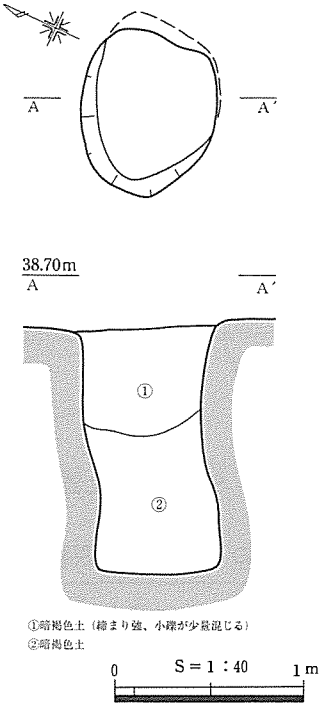
第30図　SK19



第33図　SD1



第31図　SK20



第32図　SK21

SK15（第26図、PL.4）H10グリッド南端、標高約39.2～39.1mのB区西側斜面の北側で、SI2の南東側に位置する。長径0.88m、短径0.74mの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で1.02mを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

SK16（第27図、PL.5）C15グリッド西側、標高約41.4～41.7mのB区東端斜面の北西側で、SK12の南西側に位置する。長軸0.84m、短軸0.66mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.53mを測る。底面中心部に、径約24cm、深さ約10cmのピットを持つ。遺物は出土しておらず時期不明であるが、その形態から、落とし穴としての機能をもつものと考えられる。（大野）

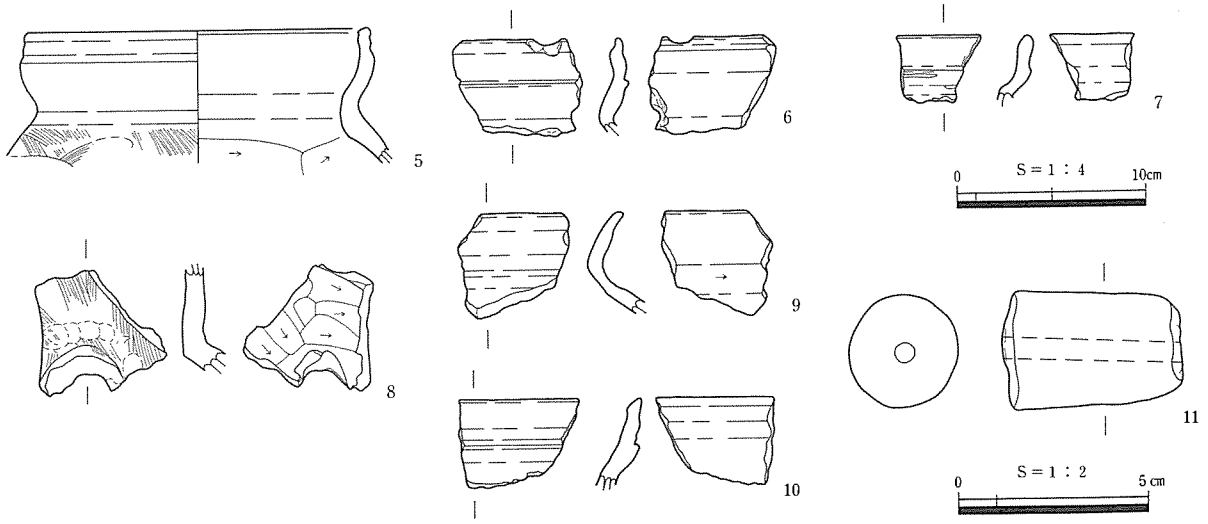
SK17（第28図、PL.５）Ｂ16グリッド北西側、標高約40.4～40.3ｍのＢ区東端斜面の中央部で、SK16の南東側に位置する。長径1.00ｍ、短径0.80ｍの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で1.26ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

SK18（第29図、PL.５）Ｉ14のグリッド北東端、標高約38.3～38.1ｍのＢ区西側斜面の南側、SK21の西側に位置する。長径1.06ｍ、短径1.00ｍの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で1.21ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

SK19（第30図、PL.５）Ｇ14のグリッド北西側、標高約40.0～39.7ｍのＢ区西側斜面の南東側、SK20の北西側に位置する。長径0.76ｍ、短径0.74ｍの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で1.12ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

SK20（第31図、PL.５）Ｇ14のグリッドほぼ中央、標高約40.8～40.6ｍのＢ区西側斜面の南東側、SK19の南東側に位置する。長径0.70ｍ、短径0.51ｍの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.85ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）

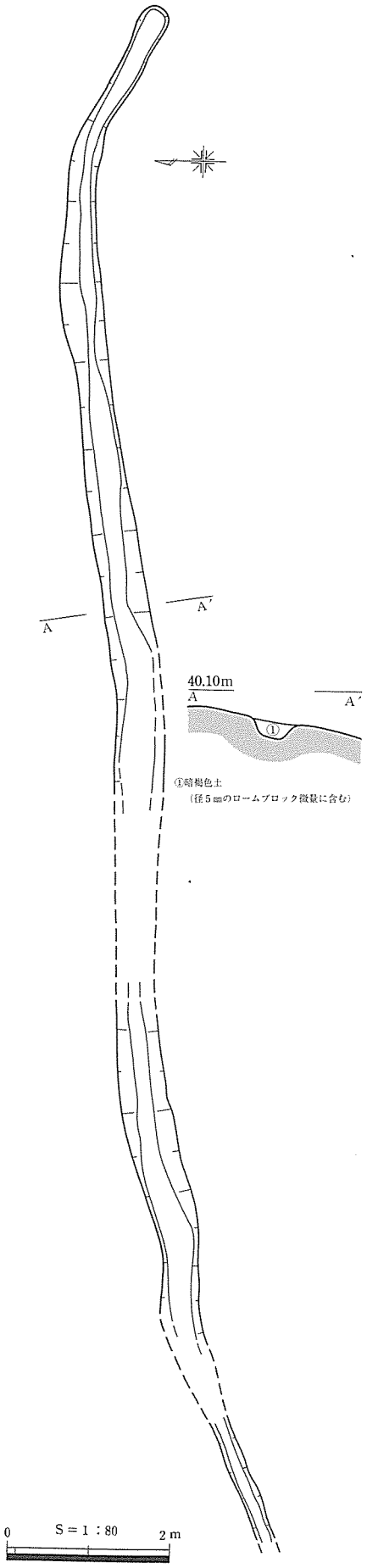
SK21（第32図、PL.５）Ｈ14のグリッド北西側、標高約38.5～38.3ｍのＢ区西側斜面の南側、SK18の東側に位置する。長径0.96ｍ、短径0.76ｍの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大で1.09ｍを測る。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。（鍋倉）



第34図　SD１出土土器

第４表　SD１出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
5	SD１ 埋土中	土師器 甕 口縁～頸部	第34図 PL.８－１	器高:△7.1cm 口径:※18.0cm	口縁部 １／６	外面:口縁～頸部ナデ、肩部ハケ 内面:口縁～頸部ナデ、肩部ケズリ	黄橙色	密、3㎜以下の 石英少量含む	
6	SD１ 埋土中	土師器 甕 口縁部	第34図 PL.８－１	器高:△4.9cm	口縁部 １/８以下	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ、頸部ケズリ	黄橙色	密、雲母 中量含む	
7	SD１ 埋土中	土師器 甕 口縁部	第34図 PL.８－１	器高:△3.4cm	口縁部 １/８以下	内外面:ナデ	橙色	密、雲母 少量含む	
8	SD１ 埋土中	土師器 不明	第34図 PL.８－１	器高:△6.7cm	全体 １/８以下	外面:ハケ 内面:ケズリ	浅黄橙色	密、雲母 中量含む	突起状になる部分は棒状の粘土が挿入されていたものと考えられる。
9	SD１ 埋土中	土師器 甕 口縁～頸部	第34図 PL.８－１	器高:△5.3cm	口縁部 １/８以下	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ、頸部ケズリ	浅黄橙色	密	
10	SD１ 埋土中	土師器 甕 口縁部	第34図 PL.８－１	器高:△4.6cm	口縁部 １/８以下	内外面:ナデ	橙色	密	
11	SD１ 埋土中	土製品 土錘	第34図 PL.９	長さ:4.7cm 最大幅:3.1cm 孔径：5.5㎜	完形	全面ナデ	にぶい黄橙色	密	重量：45.4g



第35図　SD２

（４）溝状遺構

溝は２条検出された。いずれもB区西側谷部であり、傾斜に沿うような形で溝が掘られていた。しかし、この谷部はソフトローム（基本層序第Ⅲ層）が残存している地点であり、もともと溝は地形に関係なく掘られていたものが、削平を受けていない部分のみ残存していた、という可能性も考えられ、谷部という地形に関係あるものであるかどうかは判断できなかった。（大野）

SD１（第33・34図、第４表、PL.５・８・９）G10グリッド南側、谷部北側斜面に位置する。中央部は削平され一部途切れるが、長さ11.3ｍ以上、幅0.6～0.8ｍ、検出面からの深さ20cmを測る。主軸をほぼ北西方向にとる。谷部北側斜面の等高線に沿うように掘削されており、西端と東端における溝底の標高差はほぼ認められなかった。

出土遺物としては、埋土中より土器（５～10）や土錘（11）が出土している。これらの土器はほぼ天神川編年Ⅷ～Ⅵ期に相当するもので、古墳時代中期後半の所産である。これは、SI１・２の想定される時期と同時期のであり、SD１も当該期のものである可能性がある。

この溝の性格については不明であるが、溝底の標高差が認められないことから、水路のような性格のものではなく、なにか区画を目的とした性格のものではないかと推察される。（大野）

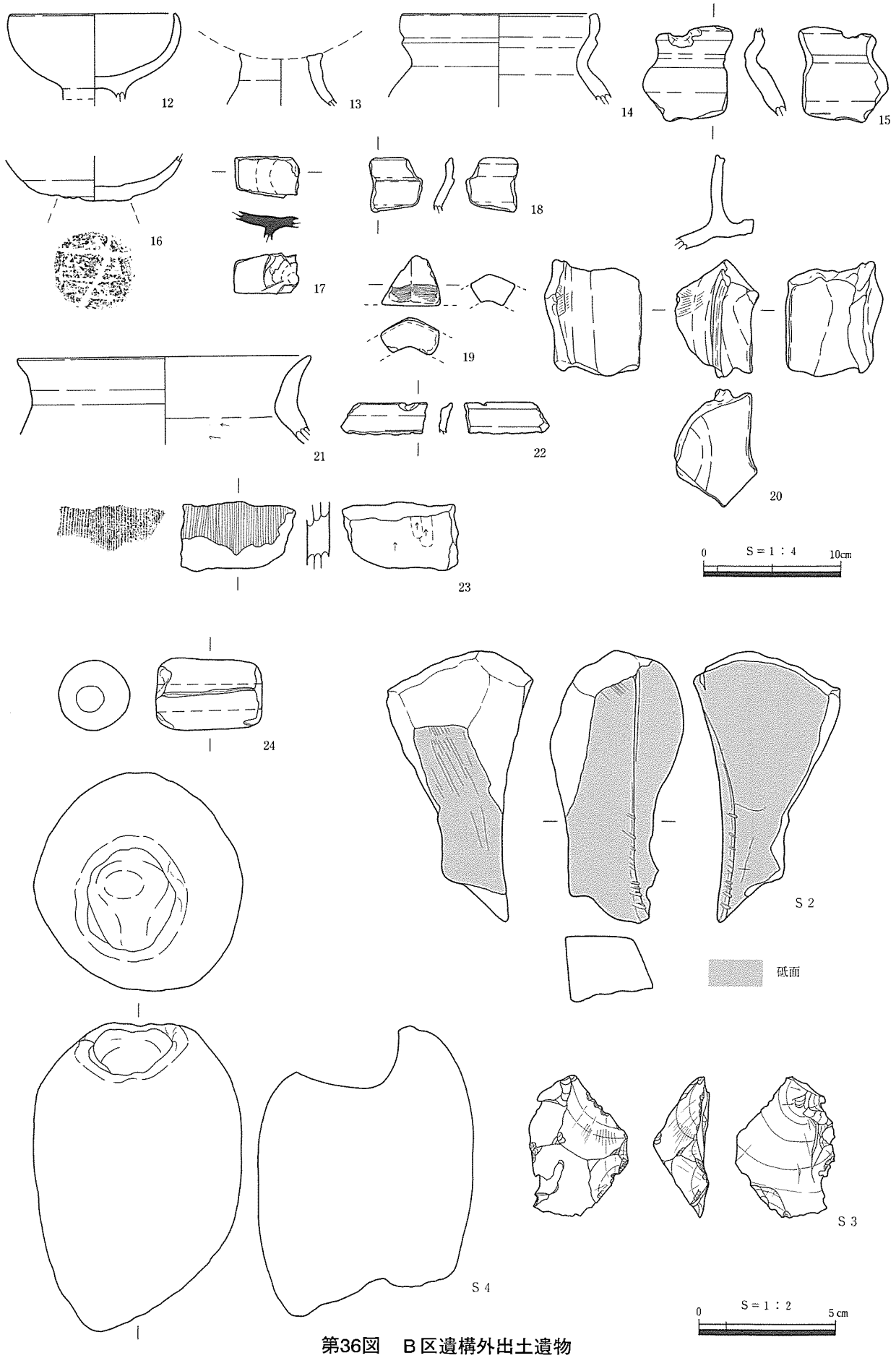
SD２（第35図、PL.６）I11グリッド中央部、谷部北側斜面下部に位置する。中央部は根による撹乱をうけ残存していなかったが、長さ19.2ｍ以上、幅0.25～0.56ｍ、検出面からの深さは約21cmを測る。主軸をほぼ東西方向にとり、東端部と西端部の床面の標高差は約0.8ｍである。

遺物は出土しなかった。SD１との関係についても、両遺構とも同じ暗褐色系の埋土であるので、同時期に、同じ目的の元に掘削された溝である可能性はあるが、その性格まで検討できるような状況では確認できなかった。（大野）

（５）遺構外出土遺物（第36図、第５・６表、PL.８・９）

遺構外出土遺物は、グリッド毎に一括して取り上げた。全体の傾向として、グリッド杭のＦラインからＩラインの間で出土した遺物が圧倒的多数を占め、これらはほぼＢ区西側の谷を埋めた客土中からの出土である。この客土は、第３節でも触れたようにＢ区東側を削平した土を利用したものと思われるので、かつてＢ区東側に存在したであろう遺構の時期や性格を考える上での唯一の手がかりとなる資料である。

12・13は土師器高坏で、12は深い椀状の坏部である。14・18・22は複合口縁甕の口縁部片であるが、口縁部下端の退化が進んだ形態である。20は移動式竈の庇部で、23は大型甕の



第36図　Ｂ区遺構外出土遺物

胴部片であろう。

これらの遺物の特徴は、すべて天神川編年Ⅷ～Ⅸ期（古墳時代中期後半）の特徴を示している。19に挙げた近世以降のものと思われる桟瓦片以外、土錘（24）や砥石（Ｓ２）など、他の遺物もほぼ当該期のものとして矛盾は無いものと思われる。

以上のように、遺構外出土遺物を概観した結果、Ｂ区東側には古墳時代中期後半の時期を中心とした遺構が存在しており、その性格としては、竈（20）や砥石（Ｓ2）が出土していることから、集落的な性格の遺構が存在していた可能性が高いと考えられる。

つまり、もともとはＢ区丘陵上全体に、竪穴建物跡を中心とした遺構群が広がっていたという状況を復元できる。（大野）

第５表　遺構外出土土器観察表

No.	遺構・地区層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
12	F12グリッド	土師器 高坏 坏部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△6.3cm 口径:12.0cm	坏部 ほぼ完形	内外面：ナデ	浅黄橙色	やや粗、2㎜以下の石英多量に含む	
13	F12グリッド	土師器 高坏 脚部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△3.8cm	脚部 1／3	摩滅著しく調整不明	浅黄橙色	やや粗	
14	G10グリッド	土師器 甕 口縁～肩部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△6.1cm 口径:※14.0cm	口縁部 1／8	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ、下部摩滅により不明	黄橙色	密、1.5㎜以下の石英少量含む	
15	G10グリッド	土師器 小型甕？ 口縁～肩部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△7.0cm	口縁部 1/8以下	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ、頸部以下ケズリ→ナデ	橙色	密	
16	G10グリッド	土師器 高坏 坏部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△3.3cm	坏部 1／2	摩滅著しく調整不明	浅黄橙色	やや粗、2㎜以下の石英多量に含む	脚部接合を安易にするため底部に不正方向沈線を施す
17	G11グリッド	須恵器 高坏 底部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△2.1cm	坏部 1/8以下	内外面：回転ナデ	灰黄褐色	密	脚部に透孔
18	G11グリッド	土師器 甕 口縁部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△3.9cm	口縁部 1/8以下	内外面：ナデ	灰白色	やや粗	
19	H10グリッド	桟瓦	第36図 PL. 9	器高:△2.7cm	全体 1/8以下	内外面:ナデ	浅黄橙色	密	
20	G11グリッド	土製品 竈 庇部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△8.6cm	全体 1/8以下	外面:胴部ハケ、庇部ナデ 内面:ナデ	浅黄橙色	密、2㎜以下の石英中量含む	
21	19グリッド	土師器 甕 口縁部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△6.5cm 口径:※21.0cm	口縁部 1／5	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	明黄褐色	やや粗、雲母少量含む	
22	110グリッド	土師器 甕 口縁部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△2.2cm	口縁部 1/8以下	内外面:ナデ	にぶい黄橙色	密	
23	Ｂ区	土師器 甕 胴部	第36図 PL. 8 － 2	器高:△4.9cm	全体 1/8以下	外面:ハケ 内面:ケズリ	浅黄橙色	密、雲母中量含む	
24	19グリッド	土製品 土錘	第36図 PL. 9	長さ:3.9cm 最大幅:2.6cm 孔径:1.0cm	完形	全面ナデ	にぶい黄橙色	密	重量：28.6ｇ

第６表　遺構外出土石器観察表

No.	遺構・地区層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ［cm］	幅［cm］	厚さ［cm］	重量［ｇ］	石材	備　考
Ｓ２	G13グリッド遺構外	第36図 PL. 9	砥石	砥面を３面もつ	10.1	4.8	5.4	186	流紋岩質凝灰岩	
Ｓ３	G13グリッド遺構外	第36図 PL. 9	剥片		5.2	3.7	2.1	24.8	黒曜石	
Ｓ４	Ｂ区遺構外	第36図 PL. 9	不明	端部に窪みをもつ	11.3	7.7	8.1	500	角閃安山岩	

第７表　ピット計測表

No.	長径×短径(cm)	厚さ(cm)	土　色	備　考
1	38×26	24	①褐色土（径１～５㎜のローム粒を少量含む）	
2	32	66	①暗褐色土（径１～30㎜のローム粒を多量に含む）	
3	28	66	①暗褐色土	
4	40	60	①褐色土②褐色土（締まり弱）	
5	27	36	①褐色土②褐色土（締まり弱）	
6	31	62	①暗褐色土（ローム粒を少量含む）②褐色土③暗褐色土	
7	36×28	25	①褐色土	
8	82×70	58	①黒色土（締まり弱）	
9	66×60	38	①暗褐色土	

第４章　別所中峯遺跡の調査

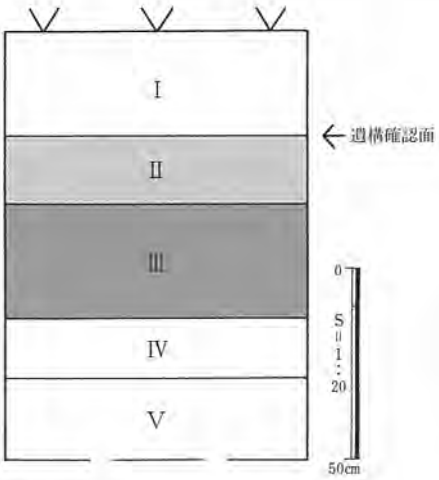
第１節　立地と層序

別所中峯遺跡は、赤崎町と東伯町の町境に所在し、ほぼ南北にのびる、いわゆる痩せ尾根上にある。また、谷を挟んで東側の丘陵上には、古墳時代後期を中心とした時期の集落跡が検出されている東伯町八橋第８・９遺跡があり（『八橋第８・９遺跡』鳥取県教育文化財団2004）、これら両遺跡が立地する丘陵も、松谷中峰遺跡と同じく大山裾野よりのびた台地に由来するものである。

現況は雑木林であったが、調査区南側の一部に南隣する果樹園の一部がかかっており、梨栽培が行なわれていた。

尾根の標高は52～42ｍで、調査区中央は尾根の鞍部となっており、鞍部より調査区北側にはあたかも人為的に盛られた墳丘のような地形が認められる。同様の地形は、八橋第８・９遺跡の所在する東側丘陵、さらに西側の丘陵断面にも認められるため、おそらくこれらの丘陵が、河川により南北に分断される以前の時期の所産であろうと考えられる。

本遺跡の基本層序は、松谷中峰遺跡など、周辺の丘陵部の堆積と同様で、基本層序第Ⅱ層のソフトロームが遺構確認面であり、遺構確認面下には「大山上部火山灰」となっていた。しかし、第Ⅲ層下に認められるはずのAT層はほぼ確認できず、認められる部分でも２～３cm程の薄い堆積であった。（大野）



Ⅰ　暗褐色土（表土）
Ⅱ　黄褐色土（ソフトローム）
Ⅲ　青灰色土（上のホーキ層）
Ⅳ　白色土（粘性強、締まり強）
Ⅴ　淡赤褐色土（粘性強、締まり強）

第37図　基本層序柱状図

写真３　確認トレンチを掘る

写真４　重機による表土剥ぎ

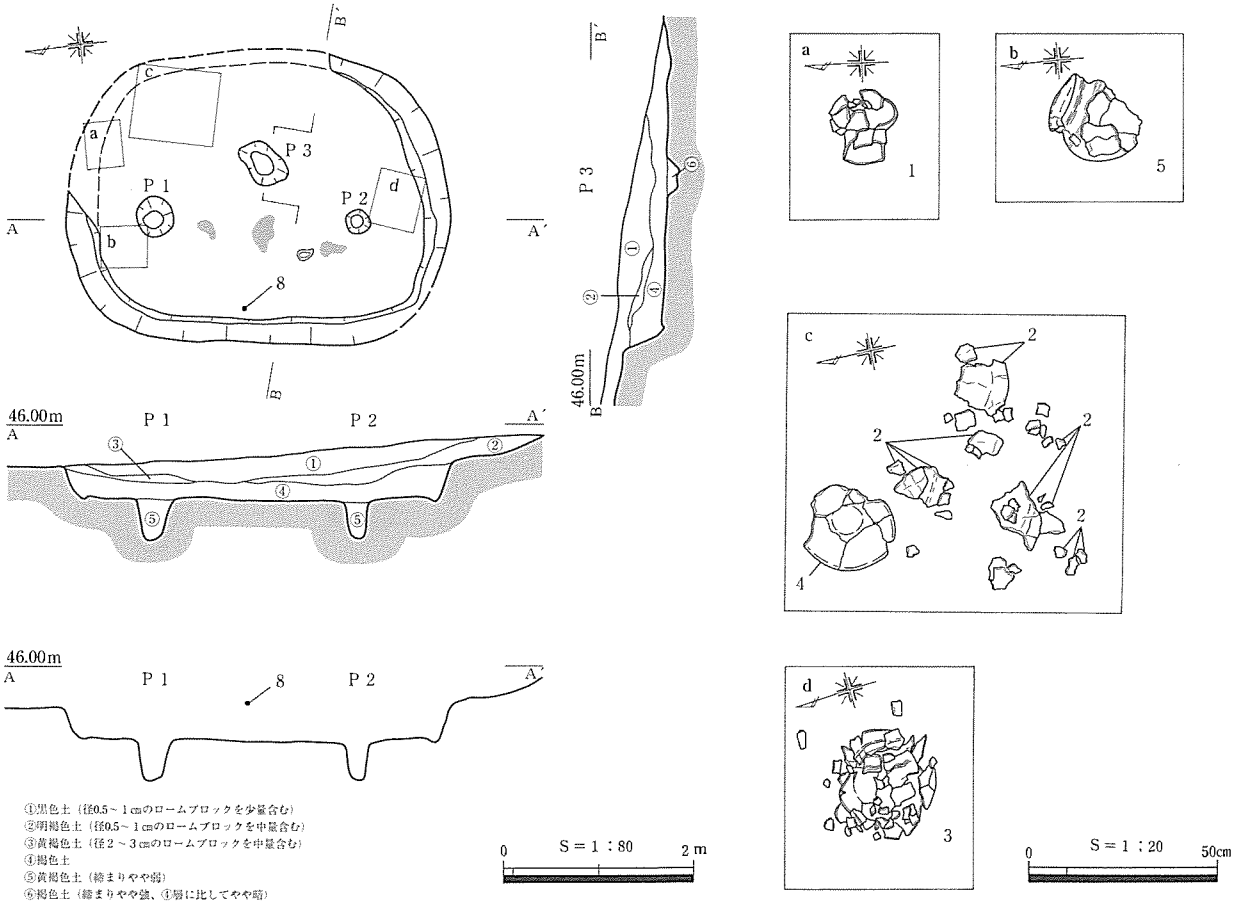
第38図　別所中峯遺跡調査前測量図

第39図　別所中峯遺跡調査後測量図

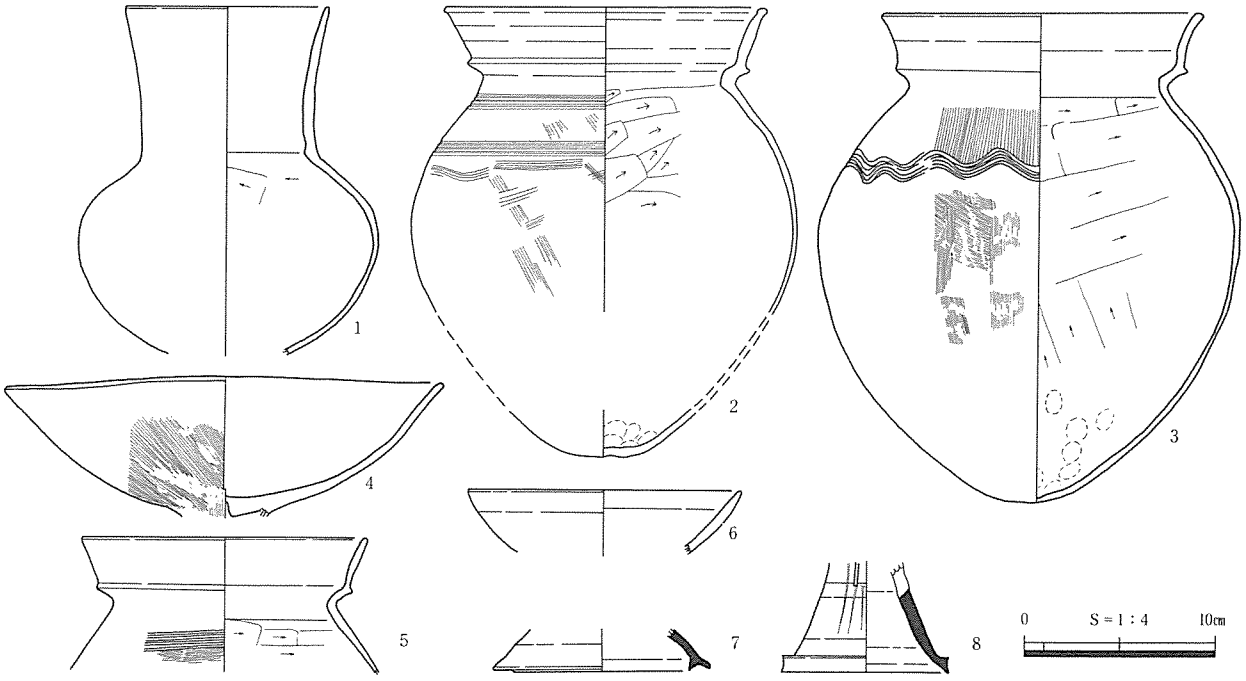
第２節　弥生時代末から古墳時代前期の調査

（１）概要

当遺跡で、確認できた遺構で時期の判別できるものとしては、この時期のみであり、竪穴建物跡３棟、貯蔵穴1基、儀礼跡と考えられる土坑１基が確認できた。（大野）



第40図　SI１



第41図　SI１出土土器

（２）竪穴建物跡

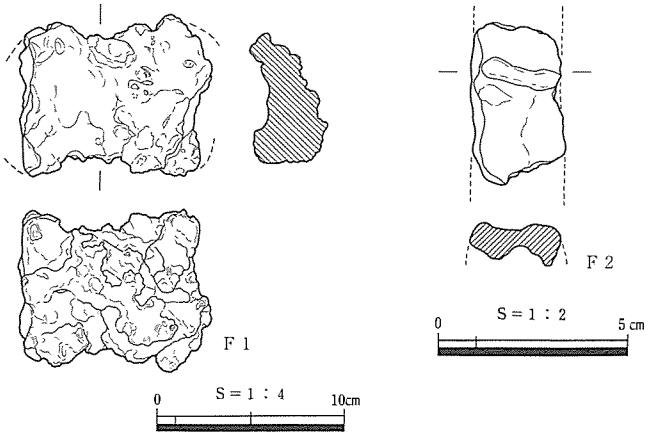
SI１（第40～42図、第８・９表、PL.11・16・18・20）Ｅ２グリッド南東端からＦ２グリッド北東端にまたがり、標高約45.7～45.1ｍの北東側斜面に位置する。

平面形は隅丸長方形で、長軸4.16ｍ、短軸3.02ｍを測る。検出面からの深さは最大で南壁約0.5ｍで、基本層序第Ⅲ層である「上のホーキ層」を床面とし、貼床は施されていなかった。復元される床面積は約8.36㎡である。周壁溝は断面U字状、幅７～12cm、深さ３～４cmで、確認できなかった北東部壁部を除けば、ほぼ全周する。

ピットは床面に３基確認できた。主柱穴はP1（43×39－45）cm・P2（28×26－38）cmで、2本柱の建物であったと考えられる。P3（52×44－12）cmは浅い土坑で、中央ピットと考えられる。また、Ｐ１とP2の間、SI１のほぼ中央部の床面に赤化した被熱面が3箇所確認された。

出土遺物としては、床面直上より甕３個体（２・３・５）、長頸壷（１）、高坏坏部（４）がつぶれた状態で出土した。また、埋土中より、椀状鍛冶滓（Ｆ１）が出土している。この鉄滓が出土した埋土上層からは、明らかに本遺構に伴わないと考えられる須恵器片（７・８）が出土していることから、このＦ１も本遺構に伴わない可能性が高いと考えられる。

この遺構の想定される時期としては、床面直上より出土している土器がおおむね天神川編年Ⅰ期に相当することから、弥生時代末～古墳時代初頭の年代が与えられる。（大野）



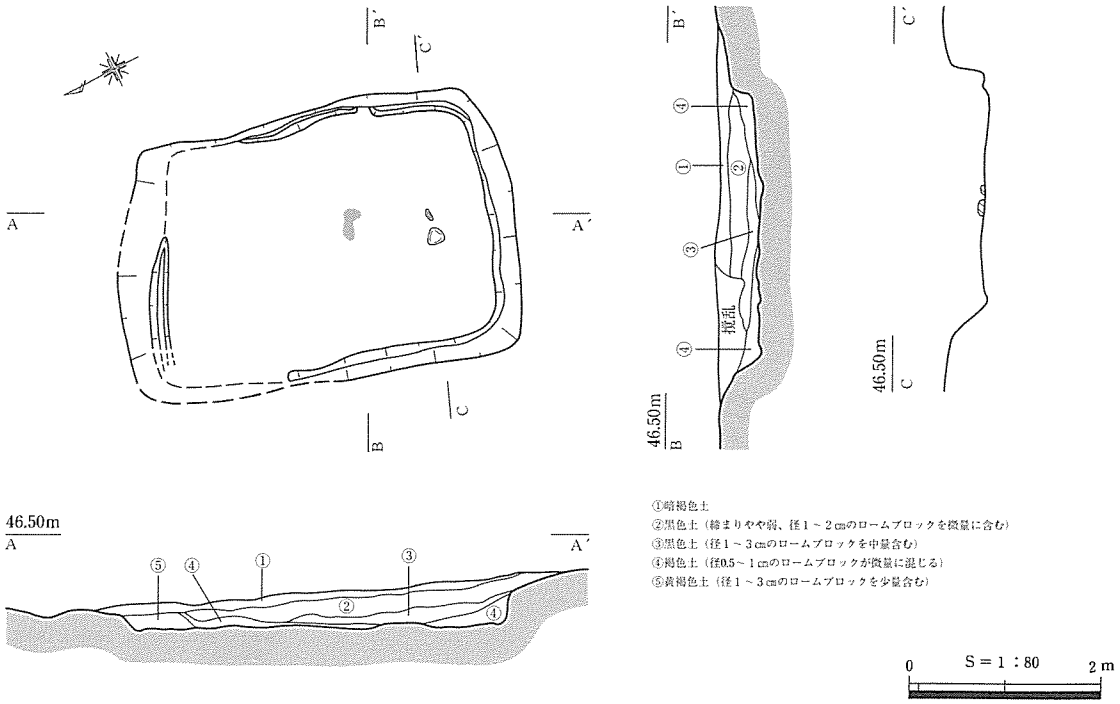
第42図　SI１出土鉄関連遺物

第８表　SI１出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
1	SI１ 床面直上	土師器 長頸壷	第41図 PL.16－１	器高:△18.35cm 口径:10.8cm 胴部最大径:15.9cm	口縁部3/4 胴部１/4	外面:ナデ 内面:口縁～頸部ナデ、胴部ケズリ→ナデ	橙色	密、２㎜以下の砂粒を含む	底部は意図的に割られたように見えるが、割れ口摩滅により判別困難
2	SI１ 床面直上	土師器 甕	第41図 PL.16－１	器高:24.0cm 口径:16.0cm 胴部最大径:20.4cm	全体 １／４	外面:口縁～頸部ナデ、胴部ハケ→粗いナデ 内面:口縁～頸部ナデ、胴部ケズリ	浅黄橙色	密	頸部及び肩部平行沈線 胴部外面煤付着 底部内面に指頭圧痕
3	SI１ 床面直上	土師器 甕	第41図 PL.16－１	器高:26.0cm 口径:16.6cm	ほぼ完形	外面:口縁部～頸部ナデ、肩部ハケ→波状文、胴部ハケ	淡黄色	密	口縁部一部及び肩部以下煤付着
4	SI１ 床面直上	土師器 高坏 受部	第41図 PL.16－１	器高:△7.45cm 口径:23.2cm	受部 ほぼ完存	外面:口縁部ナデ、下部ハケ 内面:ナデ？	にぶい黄橙色	密	脚部接合部に棒状のものを差し込んだ痕跡あり
5	SI１ 床面直上	土師器 甕 口縁～肩部	第41図 PL.16－１	器高:△7.1cm 口径:15.0cm	口縁～肩部 １／２	外面:口縁～頸部ナデ、肩部:ハケ→平行沈線 内面:口縁～頸部ナデ、肩部ケズリ	鈍い黄色	密	肩部平行沈線原体は二枚貝と考えられる
6	SI１ 埋土中	須恵器 高坏 口縁部	第41図 PL.18－２	器高:△3.3cm 口径:※14.4cm	口縁部 １／６	内外面：回転ナデ	暗黄灰色	密	
7	SI１ 埋土中	須恵器 坏蓋	第41図 PL.18－２	器高:△2.3cm 口径:※9.3cm	口縁部 １／５	内外面：回転ナデ	濃い灰色	密	
8	SI１ 埋土中	須恵器 高坏 脚部	第41図 PL.16－１	器高:△5.8cm 底径:※8.9cm	脚部 １／３	内外面：回転ナデ	灰色	密	脚外面に、透孔を意図したと考えられる縦方向３本沈線を施す

第９表　SI１出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	備　考
F１	SI１	第42図	椀状鍛冶滓	面は平らに窪み、下面は泡立つ 上面赤褐色、下面暗褐色を呈す	10.2	8.5	3.9	340	両端を欠く
F２	SI１	第42図 PL.20－１	不明鉄製品	断面筒状、棒状鉄製品？	4.3	2.6	1.1	13.2	



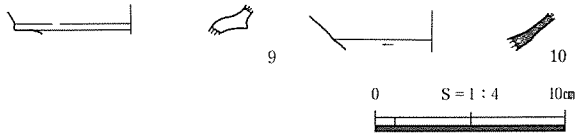
第43図　SI 2

SI 2（第43・44図、第10表、PL.12・18）Ｅ２グリッド北西部、標高約46.0～45.2mの平坦面に位置する。長軸4.25m、短軸2.92mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.46mを測る。床面は基本層序第Ⅲ層である「上のホーキ層」をそのまま床面とし、貼床は施されていなかった。

周壁溝は南側半分と北壁に一部残存していた。幅10～19cm、深さ３～５cmで、本来は全周していたものと考えられる。復元される床面積は約8.35m²である。

床面では赤化被熱面1箇所と川原石が検出されたが、ピットは検出できなかった。この遺構周辺でもピットは検出されず、なにか特殊な建て方をされたものであろうことが想像される。この竪穴建物の実際の掘り込み面（旧表土面）は遺構確認面よりもさらに上部で、大部分を削平されていると考えられる。よって、削平された上部に何らかの痕跡が存在していた可能性があるが、当遺構からは上屋構造を類推させるようなものは確認できなかった。

床面直上での遺物出土はみられず、埋土中で土師器甕片（９）および須恵器蓋坏の破片（10）が出土した。

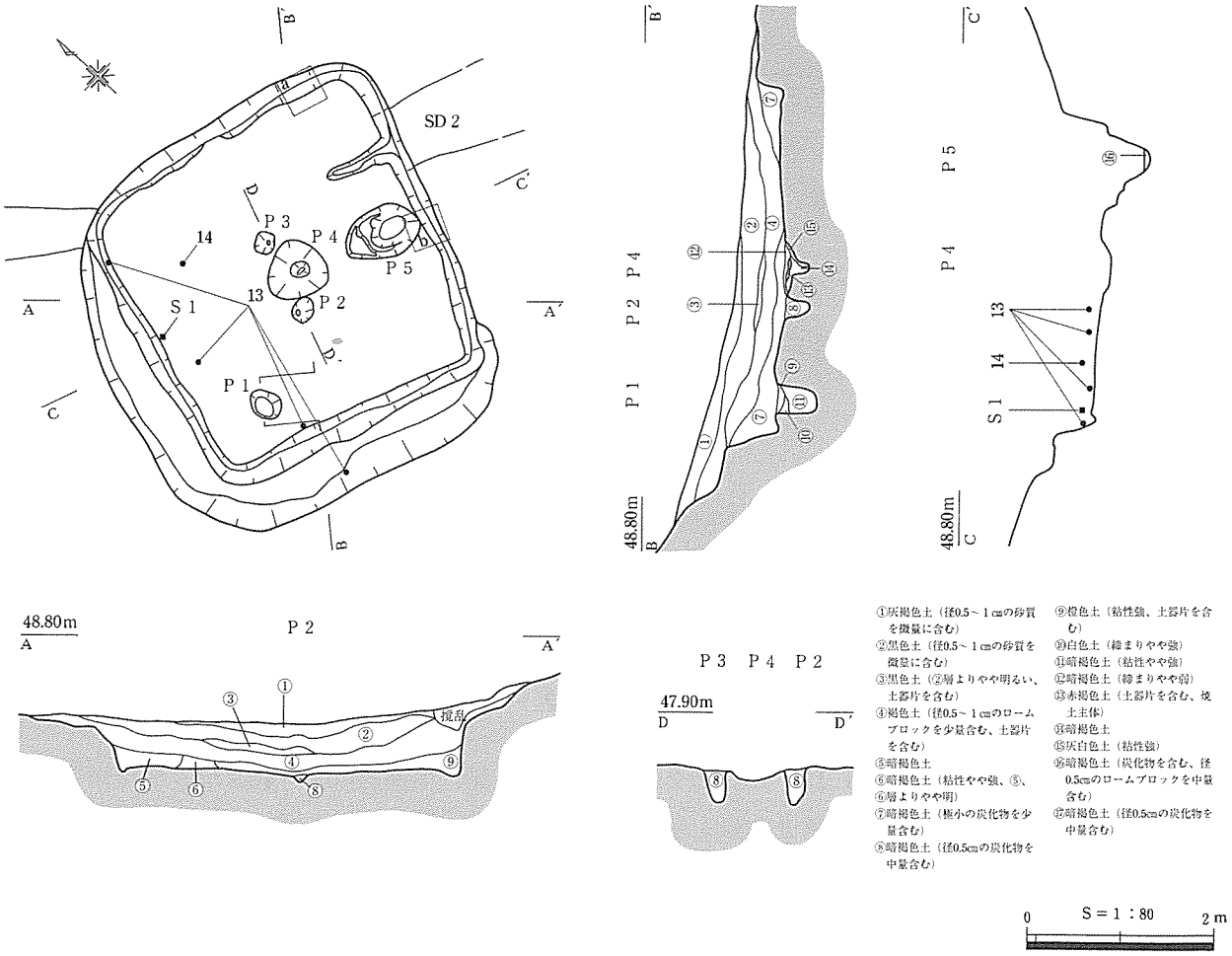


第44図　SI 2 出土土器

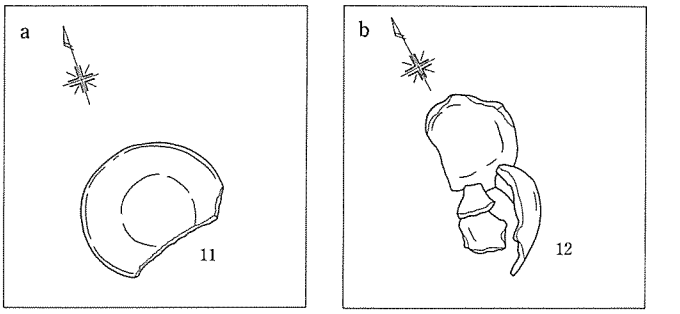
時期の想定できるような状況での遺物の出土をみなかったが、埋土の状況及び周辺の遺構との関係性を考え合わせると、９の土師器片の天神川Ⅰ期（弥生時代末～古墳時代初頭）の時期である可能性が高く、10の須恵器片はSI１と同じく上層に紛れ込んだものであると考えておきたい。　（大野）

第10表　SI 2 出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
9	SI 2 埋土中	土師器 甕 口縁部	第44図 PL.18－２	器高:△1.4cm	口縁部 １/8以下	内外面:ナデ	灰黄色	密、2mm以下の砂粒を含む	
10	SI 2 埋土中	須恵器 蓋坏	第44図 PL.18－２	器高:△2.05cm	全体 １/８以下	外面:上部ナデ、下部回転ケズリ→ナデ 内面:回転ナデ	濃い灰色	密	



第45図　SI 3



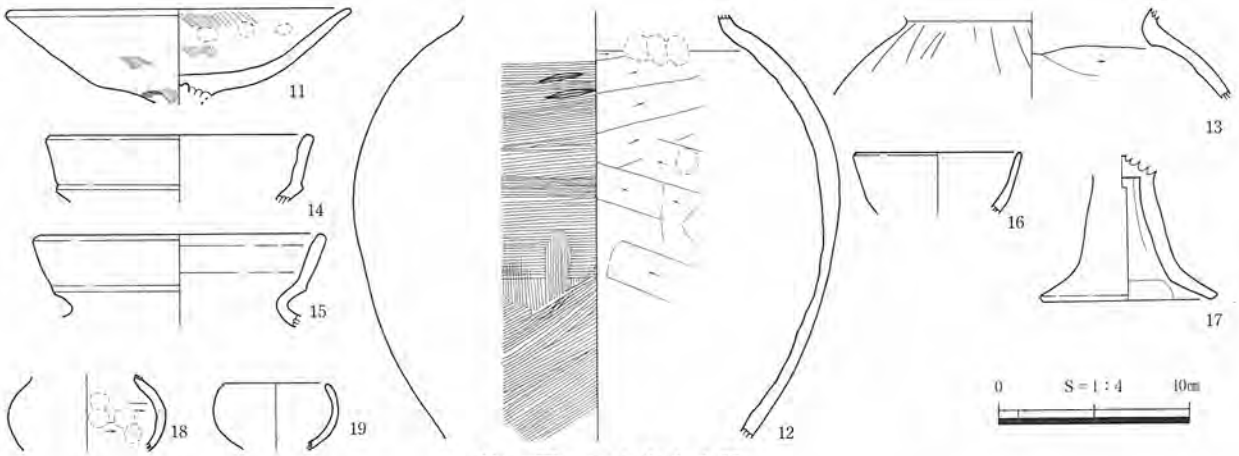
第46図　SI 3遺物出土状況

SI 3（第45～48図、第11・12表、PL.12・16・18・20）Ｉ４グリッド北西部、標高約48.4～47.6ｍの南側斜面に位置する。SD２が東壁から西壁にかけて壊していたが、層序を記録した部分はSD２の底面レベルまで削平されていた部分であり、土層断面には反映できなかった。長軸4.28ｍ、短軸3.98ｍの方形プランで、検出面からの深さは最大で南壁0.82ｍを測る。

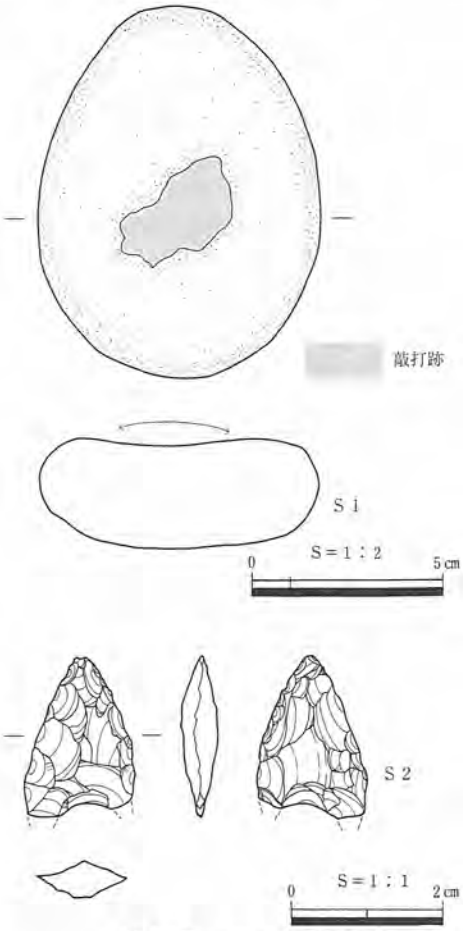
斜面上部に面する西壁と南壁の外側には、さらにもう一段20～30cm程の深さで掘り込みが確認できた。これは竪穴建物を建てる際の整地に由来するもので、１ｍ近くある南側と北側の高低差を解消するため、高い部分を粗く削り、ある程度平坦面を造り出した後に方形のプランに掘り込む、という手順を踏んだ痕跡であると考えられる。

床は貼床を施さず、基本層序第Ⅳ・Ⅴ層の層利面を床面としており、南側１／３が第Ⅴ層、以北が第Ⅳ層を床としていた。床面積は9.75m^2、周壁溝は幅14～10cm、深さ２～４cmで、北壁で一部途切れるものの本来は全周していたものと考えられる。

ピットは５基検出された。このうち主柱穴と考えられるのはＰ１（37×27－34）cmのみで、これ



第47図　SI３出土土器



第48図　SI３出土石器

に対応するピットは検出できなかった。P４（65×62－21）cmは中央ピット、P５（85×55－33）cmは壁際の特殊ピットで、中央と壁際に特殊ピットが併設されていた。P２（27×23－19）cm、P３（24×22－32）cmはP４を囲むような位置にあり、P４埋土中に認められた焼土の堆積（第13層）となんらかの関係が窺われる。また、P５北側には東壁より長さ70cm、幅12～24cm、深さ6cmの仕切り溝と考えられる溝がのびていた。

遺物は床面直上から、高坏坏部（11）および甕か壺の胴部（12）が出土した。11は床に置かれたままの状態で、12は東壁に立てかけられたような状態で出土している。その他に、埋土中から多量の土師器片（13～19）および石器（S１・S２）が出土した。また黒曜石の剥片も埋土中に多く確認されたが、製品の出土は認められなかった。

この遺構の想定される時期としては、出土遺物より、SI１・２よりやや新しく、天神川編年Ⅱ期（古墳時代前期前葉）と考えられる。（大野）

写真５　周辺の地形（南から）

写真６　現地説明会風景

第11表　SI３出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
11	SI３ 床面直上	土師器 高坏 受部	第47図 PL.16－２	器高:△4.85cm 口径:18cm	受部 ２／３	内外面：ハケ→ナデ	鈍い黄橙色	密、1.5mm以下の砂粒を含む	脚部接合部に棒状のものを差し込んだ痕跡あり
12	SI３ 床面直上	土師器 甕 胴部	第47図 PL.18－２	器高:△22.5cm 胴部最大径: ※25.8cm	胴部 １／５	外面：頸部ナデ、胴部ハケ 内面：頸部ナデ、胴部ケズリ	橙色	密、4mm以下の砂礫を含む	
13	SI３ 埋土中	土師器 甕 肩部	第47図 PL.16－２	器高:△4.8cm	肩部 １／３	外面：ナデ→沈線 内面：上部ナデ、下部ケズリ	橙色	密、１mm以下の砂粒を含む	外面赤彩？
14	SI３ 埋土中	土師器 甕 口縁部	第47図 PL.18－２	器高:△3.45cm 口径:※13.7cm	口縁部 １/8以下	内外面：ナデ	鈍い橙色	密	
15	SI３ 埋土中	土師器 甕 口縁部	第47図 PL.18－２	器高:△5.0cm	口縁部 １/8以下	内外面：ナデ	鈍い橙色	密、１mm以下の砂粒を含む	
16	SI３ 埋土中	土師器 椀？ 口縁部	第47図 PL.18－２	器高:△3.2cm 口径:※8.7cm	口縁部 １／４	内外面：ナデ	黄灰色	密	
17	SI３ 埋土中	土師器 高坏 脚部	第47図 PL.16－２	器高:△7.7cm 底径:※8.8cm	脚部 １／２	外面：ナデ 内面：筒部ケズリ、裾部ナデ	灰白色 黒褐色	密	過半に黒斑
18	SI３ 埋土中	土師器 小型壷 胴部	第47図 PL.18－２	器高:△3.9cm 胴部最大径: ※8.4cm	胴部 １／３	外面：ナデ 内面：ケズリ→指オサエ	にぶい黄橙色	密、1.5mm以下の砂粒を含む	小型丸底壷か？
19	SI３ 埋土中	土師器 小型椀？	第47図 PL.18－２	器高:△3.55cm 口径:※5.4cm	全体 １／６	内外面：ナデ	灰白色	密	

第12表　SI３出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石材	備　考
S１	SI3 埋土中	第48図 PL.20－２	凹み石	上面中心部に敲打痕	9.3	9.3	2.8	294	角閃石安山石	
S２	SI3 埋土中	第48図 PL.20－２	石鏃	凹基式無茎鏃	2.1	1.5	0.5	1.2	ガラス質 安山岩	

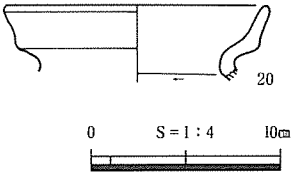
（３）土坑

SK５（第49・50図、第13表、PL.13・18）Ｆ２グリッド北西部、標高約46.2～46.1ｍの平坦面上、SD１の南側に位置する。長径0.98ｍ、短径0.92ｍの円形を呈し、検出面からの深さは最大で0.92ｍを測る。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。上縁部から最大0.14ｍ、括れ部分から最大0.28ｍ、底面縁辺部が壁側に入り込む。

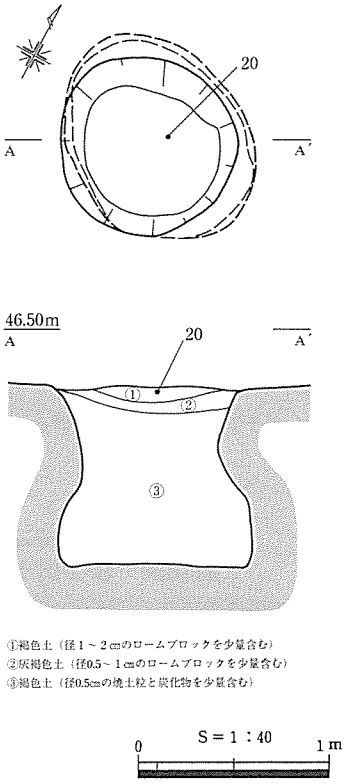
特徴的な形状から、貯蔵穴としての機能が想定される土坑である。

遺物としては古墳時代中期に降る可能性のある土師器片（20）が出土しているが、最上層からの出土であり、時期決定の基準にならないものと考える。

この土坑の時期としては、SI１・２との位置関係から、両竪穴建物跡に伴う施設である可能性が高く、これらと同時期である弥生時代末～古墳時代初頭の年代を与えておきたい。　（大野）



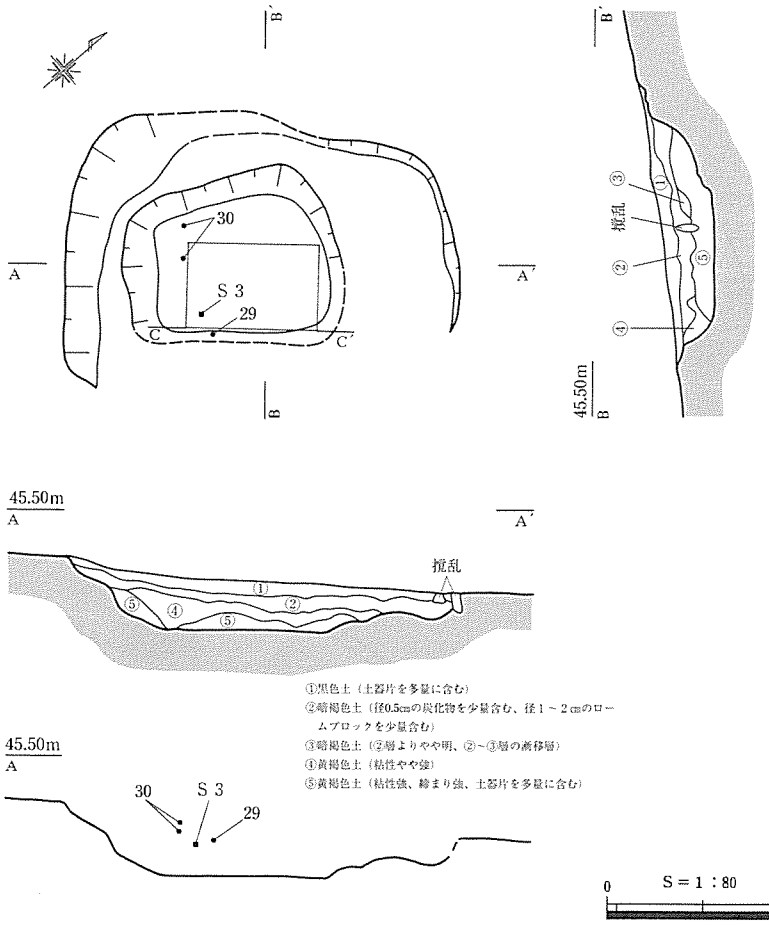
第49図　SK５出土土器



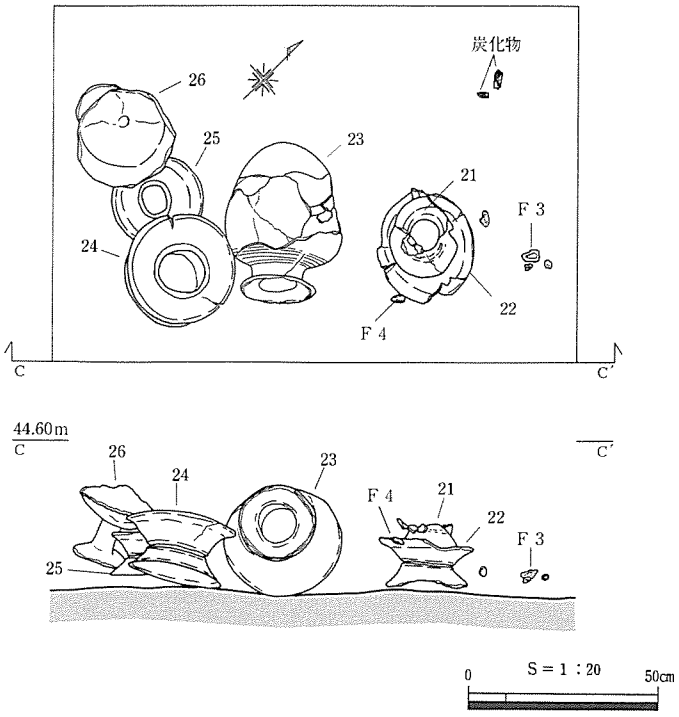
第50図　SK５

第13表　SK５出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
20	SK５ 埋土中	土師器 甕 口縁部	第50図 PL.18－２	器高:△3.85cm 口径:※13.9cm	口縁部 １/8以下	外面:ナデ 内面:口縁～頸部ナデ、頸部下ケズリ	鈍い黄橙色	密	



第51図　SK13



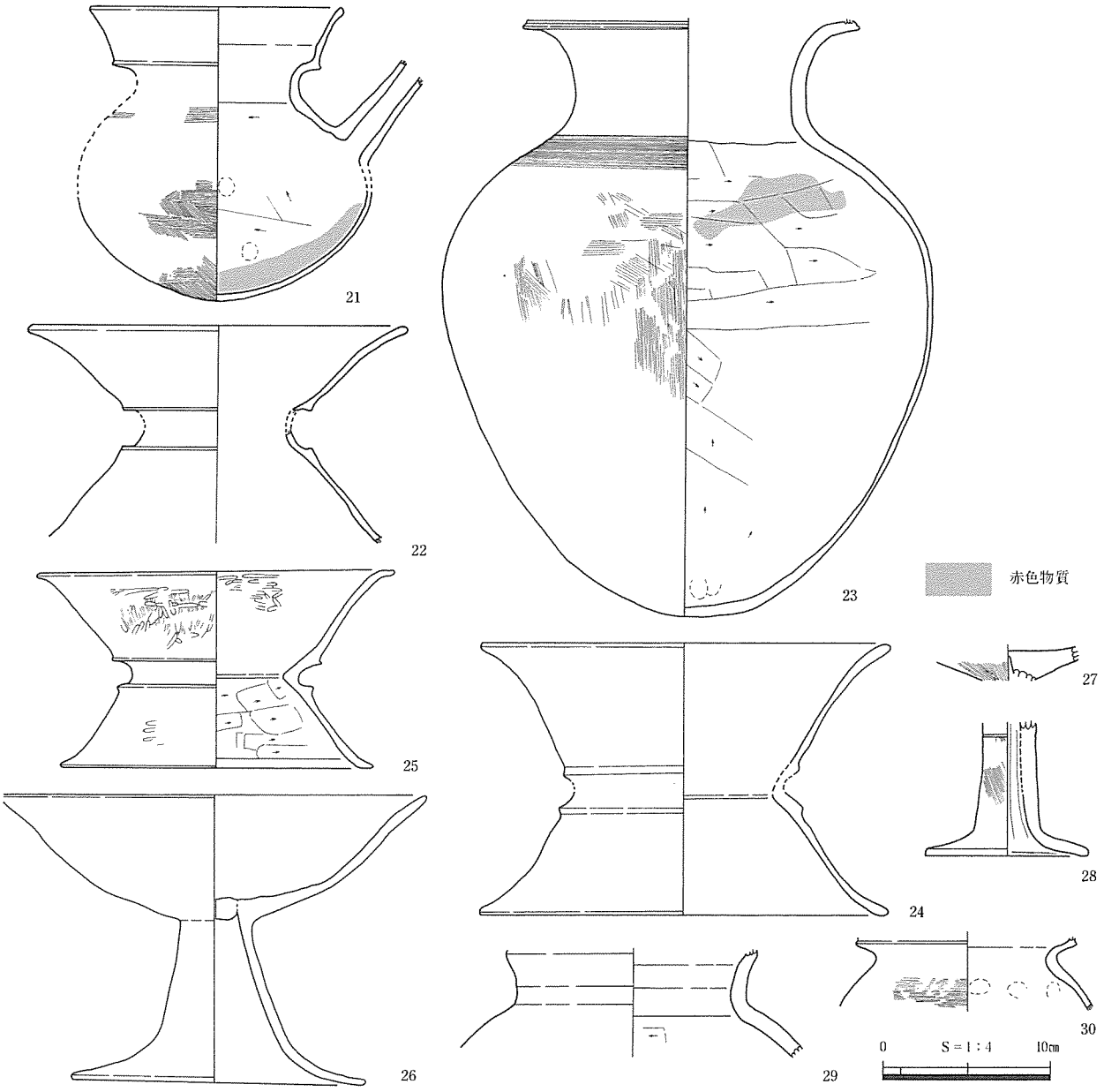
第52図　SK13遺物出土状況

SK13（第51～55図、第14～16表、巻頭図版１・２、PL.13・17・18・20）Ｇ２グリッド中央、標高約45.1～44.2mの中央鞍部東側に位置する。二段に掘り込まれ、一段目は長軸4.24m、短軸3.50m、深さ0.46m斜面方向である南東側に開く、二段目は長軸2.26m、短軸1.23m、深さ0.1～0.32mを測り、確認面から底面までの深さは最大で0.47mである。東半部は撹乱を受けており、正確な形状は不明であるが、一段目・二段目ともにほぼ隅丸方形を呈していたものと考えられる。一段目の底面は平坦ではないため、おそらくSI３と同様に、ある程度粗く整地した後、二段目となる土坑を掘り込んだものであろう。

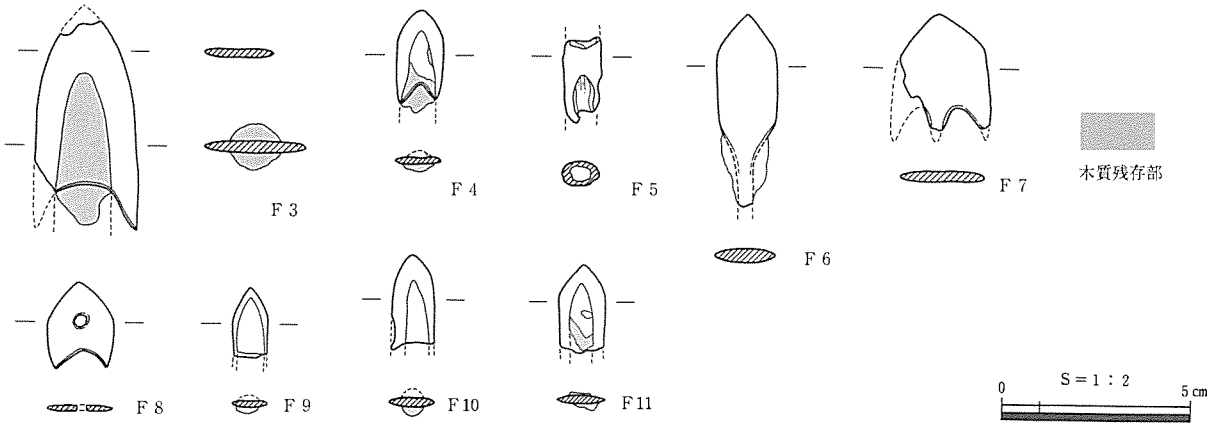
埋土の状況としては、土器片（27～30）や石器（Ｓ３～Ｓ５）など、遺物を多く含んでいた黒色土（①層）下に、暗褐色土層（②・③層）があり、底面には粘性の強い黄褐色土（④・⑤層）が堆積していた。

この黄褐色土除去後、底面に並べられた状態で土器群が検出された（第52図）。これらの土器は東から、鼓形器台㊥（22）とそれに載せられた注口土器（21）、壷（23）、鼓形器台㊦（24）、鼓形器台㊧（25）、高坏（26）である。これらはすべてほぼ完形に復元できるものであるが、本来多重口縁であったと思われる壷の口縁部のみ残存していなかった。周辺からもこの壷の口縁部と考えられるような破片は一片も確認できなかったことから、意図的に割られていた可能性が高い。

この土器群は、器台に載せられたままの状態で注口土器が出土していることなどからも、土坑に埋納されていた状態であったというよりも、儀礼などを執り行うため、なんらかの意図をもって並べら



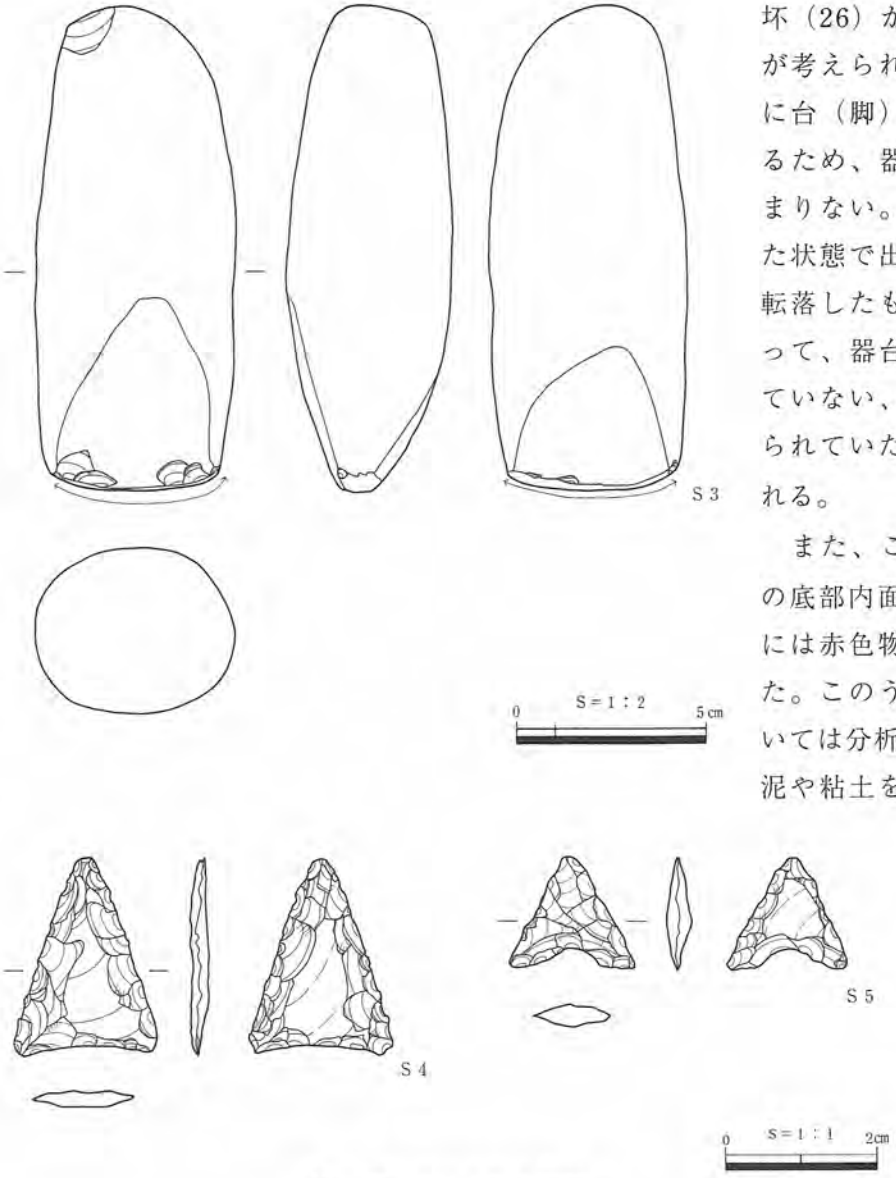
第53図　SK13出土土器



第54図　SK13出土鉄関連遺物

れたまま放置されたものであると考えられる。

土器群出土状況から、これらの土器がどのように並べられていたか復原すると、注口土器（21）―器台㊥（22）のほか、壷（23）は中央部に転がっており、器台㊦（24）に載せられていた可能性が高



第55図　SK13出土石器

い。器台㊟（25）については、高坏（26）が載せられていた可能性が考えられるが、高坏はそれ自体に台（脚）が付いており、自立するため、器台㊟に載せる必要はあまりない。また、高坏はほぼ立った状態で出土しており、器台から転落したものとは考えにくい。よって、器台㊟には、腐食し残存していない、有機質の器などが載せられていたのではないかと想像される。

また、この中で注口土器（21）の底部内面と壷（23）の肩部内面には赤色物質が沈着・付着していた。このうち注口土器のものについては分析を依頼している。結果、泥や粘土を構成する鉱物しか検出できなかったが、分析者は、これらがベンガラの原料であった可能性を指摘している（第５章第３節）。

その他の遺物として、注口土器周

写真７　作業風景（SK13）

辺からは鉄鏃が（Ｆ３～Ｆ11）が多く出土し、二段目底面北側では炭化物も検出されている。この遺構の性格の一端を物語るものと思われる。先にも述べたように、この遺構は、おそらく何らかの儀礼の跡ではないかと想像されるが、その内容については、現段階では不明といわざるを得ない。

この遺構の想定される所属年代としては、底面出土土器群から、SI１及びSI２と同期である天神川編年Ⅰ期（弥生時代末～古墳時代初頭）の時期が想定される。（大野）

第14表　SK13出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
21	SK13 床面直上	土師器 注口土器	第53図 PL.17－１	器高:17.5cm 口径:14.7cm 胴部最大径：17.5cm	全体 １／２	外面:口縁部～頸部ナデ、肩部～底部ナデ→不定方向ハケ 内面:口縁部～頸部ナデ、体部ケズリ→荒い指オサエ	浅黄橙色	やや良、1㎜以下の砂礫を含む	底部外面:煤付着 底部内面:赤色物質付着
22	SK13 床面直上	土師器 器台	第53図 PL.17－２	器高:△13.0cm 口径:22.3cm	全体 １／３	内外面摩滅著しく調整不明	淡黄色	粗	
23	SK13 床面直上	土師器 壺 頸部～底部	第53図 PL.18－１	器高:※35.9cm 底径:5.6cm 胴部最大:29.3cm	全体 ３／４	外面:口縁部下部沈線、頸部ナデ肩部平行沈線、体部不整方向ハケ 内面:頸部ナデ、肩部以下ケズリ一部指オサエ	浅黄橙色	密	肩部内面赤色物質付着 全体的に摩滅が目立つ
24	SK13 床面直上	土師器 器台	第53図 PL.18－１	器高:13.5cm 口径:23.6cm 底径:23.6cm	ほぼ完形	内外面摩滅著しく調整不明	橙色	密	焼成やや粗
25	SK13 床面直上	土師器 器台	第53図 PL.17－２	器高:11.9cm 口径:19.8cm 底径:18.0cm	完形	外面:ハケ→ミガキ、頸部ナデ 内面:受部ナデ→ミガキ、底部ケズリ	橙色	密	受部外面に黒斑
26	SK13 床面直上	土師器 高坏	第53図 PL.17－２	器高:17.6cm 口径:※25.2cm 底径:※24.3cm	坏部１/３ 脚部１/２	内外面摩滅、著しく調整不明	浅黄橙色	密	焼成やや粗
27	SK13 埋土中	土師器 高坏 受部	第53図 PL.18－２	器高:△1.9cm	受部 １/8以下	外面：ハケ 内面：ナデ	橙色	密	脚部接合部に棒状のものを差し込んだ痕跡あり
28	SK13 上層	土師器 高坏 脚部	第53図 PL.18－１	器高:△8.0cm 底径:※9.8cm	脚部 ３／４	外面：ハケ→粗いナデ 内面：裾部ハケ	黄橙色	密	
29	SK13 上層	土師器 甕 口縁～肩部	第53図 PL.18－２	器高:△6.5cm	口縁～肩部 １/8以下	外面：ナデ 内面：ケズリ→ナデ	鈍い黄褐色	密	単純口縁の甕
30	SK13 埋土中	土師器 甕 頸部	第53図 PL.18－２	器高:△4.25cm	頸部 １／５	外面：頸部ナデ、肩部ハケ 内面：頸部ナデ、肩部ナデ→指オサエ	にぶい黄橙色	密、1㎜以下の砂粒を含む	

第15表　SK13出土鉄関連遺物観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	備　考
Ｆ３	SK13 床面直上	第54図 PL.20－１	無茎鏃	木質部残存状況より、矢柄の径1.5cm前後と復原できる。	5.5	2.7	0.25	13.4	底部形状はＸ線撮影にて確認
Ｆ４	SK13 埋土中	第54図 PL.20－１	無茎鏃	矢柄痕跡明瞭、下半部に木質（径0.9cm）残る	2.8	1.2	0.4	1.8	底部形状はＸ線撮影にて確認
Ｆ５	SK13 埋土中	第54図 PL.20－１	不明鉄製品	内面に木質痕らしき筋あり	2.25	1	1	1.2	鉄分の付着した矢柄か？
Ｆ６	SK13 埋土中	第54図 PL.20－１	ナデ関柳葉形鏃	下半部錆膨れ	5.1	1.55	0.35	7.8	茎部は錆膨れにより不明瞭 写真撮影後接合
Ｆ７	SK13 埋土中	第54図 PL.20－１	腸括短茎鏃？	右腸括部を欠く	3.2	2.4	0.2	4.5	茎部不明瞭、矢柄の可能性あり 写真撮影後接合
Ｆ８	SK13 埋土中	第54図 PL.20－１	無茎鏃	中央に孔（径0.2cm）を開ける	2.4	1.8	0.12	2.1	孔はX線撮影にて確認
Ｆ９	SK13 埋土中	第54図 PL.20－１	無茎鏃	鏃身関部で欠損 矢柄痕跡残る	1.9	0.9	0.16	0.8	
Ｆ10	SK13 埋土中	第54図 PL.20－１	無茎鏃	鏃身関部で欠損 矢柄痕跡残る	2.34	1.2	0.25	1.3	
Ｆ11	SK13 埋土中	第54図 PL.20－１	無茎鏃	鏃身関部で欠損 矢柄痕跡残る	2.35	1.2	0.2	1.9	

第16表　SK13出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ 〔cm〕	幅 〔cm〕	厚さ 〔cm〕	重量 〔g〕	石材	備　考
Ｓ３	SK13 上層	第55図 PL.20－２	太型蛤刃石斧	刃部および基部一部破損	12.8	5.3	4.4	476	流紋岩質 凝灰岩	刃部刃こぼれ
Ｓ４	SK13 埋土中	第55図 PL.20－２	石鏃	平基無茎鏃	2.7	1.9	0.2	1.1	ガラス質 安山岩	
Ｓ５	SK13 埋土中	第55図 PL.20－２	石鏃	凹基式無茎鏃	1.5	1.6	0.4	0.4	ガラス質 安山岩	

第３節　時期不明遺構の調査

（１）概要

遺構の所属年代が考古学的手法で特定できなかったものとして、土坑11、溝2、段状遺構１がある。この中には理化学的分析（放射性炭素年代測定：第５章第２節）により、ある程度時期の推定できたものも含まれるが、今回は時期不明のものとして扱った。

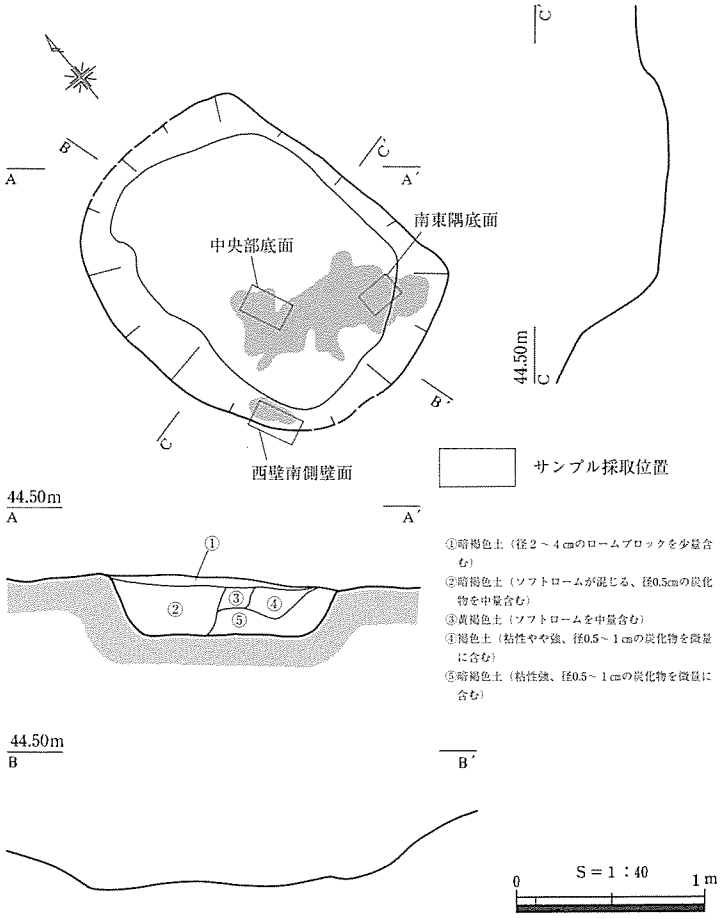
これらの遺構の多くは、８基検出された製炭土坑に関わるものであると考えられる。この地で炭焼きが行われていたという事実は、SI１埋土中及び隣接する八橋第８・９遺跡（鳥取県教育文化財団2003）より出土している鉄滓とあわせて注意されるべきものであると考える。　（大野）

（２）製炭土坑

埋土中に多量の炭化物および焼土が混入し、壁面及び底面に被熱痕跡の認められる土坑を8基検出した。これらの共通する特徴として、埋土の特徴のほかに、底面よりも壁面を中心に被熱痕跡が認められる、という点が挙げられる。以上の特徴は、同じ焼成土坑である土師器焼成坑や鍛冶炉跡などとは異なり、簡易な「伏せ焼き」法を用いて炭を焼いた跡である製炭土坑に、特徴的に認められるものであるという（註１）。

以上の点から、当遺跡で確認された被熱痕跡をもつ土坑を“製炭土坑”であると認識するに至り、他の土坑と区別して扱った。

SK１（第56図、PL.13）Ｅ１グリッド北西隅、標高約44.3ｍの北東側斜面に位置する。長軸1.9ｍ、短軸1.44ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.5ｍを測る、他に比べて比較的大型の製炭土坑である。埋土は全体的に炭化物を含み、底面や壁面の一部に炭化物が固まって付着している状況が確認できた。また、南側底面及び南東・南西隅の壁面に被熱赤化面が認められた。



第56図　SK１

当遺構の被熱赤化面について土壌サンプルを採取し、岩石学的観察により焼成温度を測定している（第５章第１節）。　（大野）

SK２（第57図、PL.13）Ｇ２グリッド北端、標高約45.5ｍの北部平坦面から谷部にかけての南側斜面に位置する。SD2が南隣を走り、SD2で囲まれた区画の外側にある。

長径1.66ｍ、短径1.44ｍの不整円形を呈するが、本来は南北を長軸にする長方形プランを指向していたものと考えられる。検出面からの深さは最大で0.34ｍを測り、東西壁面の

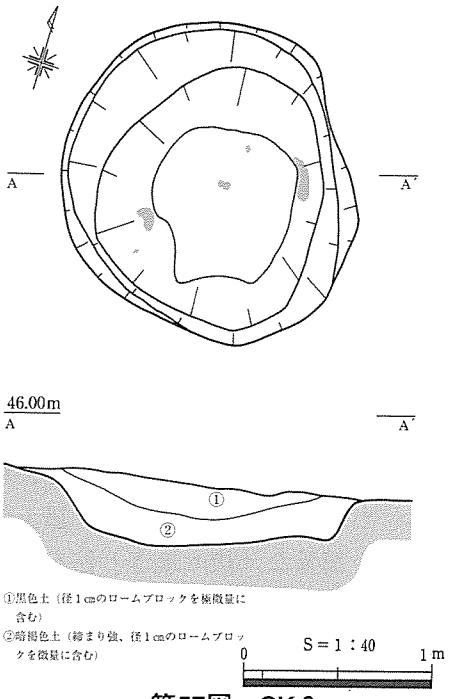
《註釈》
１）製炭土坑の特徴については、兵庫県教育委員会の森内秀造氏に現地指導していただいた際にご指摘を受けた。
文献としては、以下に詳しい。
・村田文雄1991「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化』55物質文化研究会
・木立雅朗1997「土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

一部及び底面の所々に被熱赤化面が認められた。　（大野）

SK３（第58図、巻頭図版２、PL.14）Ｇ３グリッド西端、標高約44.5～44.3ｍの谷部底面、SK９の北側に位置する。長軸1.44ｍ、短軸1.22ｍの隅丸方形を呈し、擂り鉢状に掘り込まれていた。検出面からの深さは最大で0.34ｍを測る。底面には炭層（⑤層）が認められたが、これらはすべて小片で、使用に耐えない炭片が土坑内に残されたものであろう。

被熱面については、製炭土坑８基中最も遺存状態が良好で、壁面が南東側を中心に「コ」の字状に硬化しており、特に壁面下半部は青灰色に還元焼成されている状況が確認できた。おそらく壁面下半部まで炭が詰め込まれており、燃焼時無酸素状態になったためであると考えられる。

また、埋土中に焼土塊が検出されており、上部を覆った天井部の土が崩落したものである可能性が高い。しかし、一般的な伏せ焼き法では、まず上部の土を除去した後に炭を取り出さねばならないため、覆った土が底面に崩落した状態で残るという状況は考えにくい。単に土で覆っただけの構造ではなく、焼き上がった炭を横から取り出すような構造であったのかもしれない。

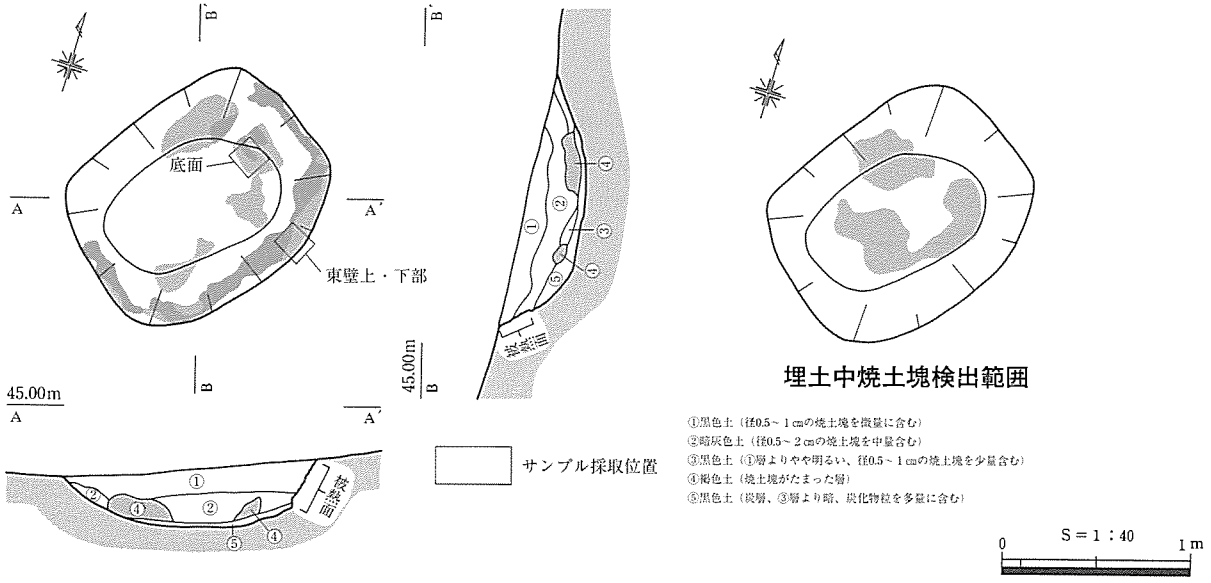


第57図　SK２

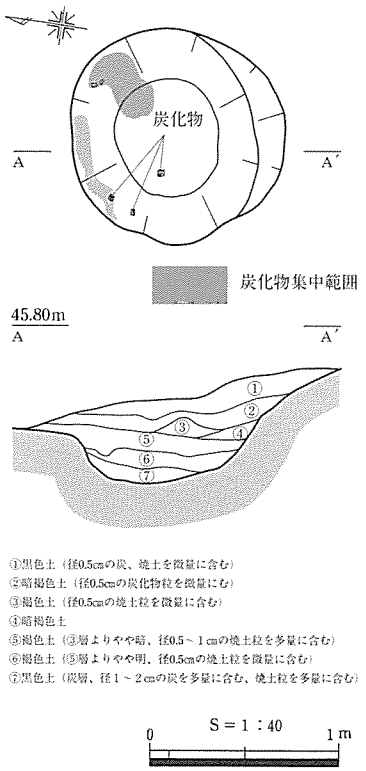
最下層より出土した炭化材について放射性炭素年代測定を依頼したところ、7世紀後半～9世紀（飛鳥～平安時代）のうちにはいる可能性が高いという測定結果が得られている（第5章第2節）。また、当遺構の被熱赤化面について土壌サンプルを採取し、岩石学的観察により焼成温度を測定している（第５章第１節）。　（大野）

SK４（第59図、PL.14）Ｈ３グリッド北西側、標高約45.4～45.3ｍの谷部南側斜面、SK８の北側に位置する。長軸1.56ｍ、短軸1.04ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.3ｍを測る。長軸北側壁面に被熱赤化面がみられた。

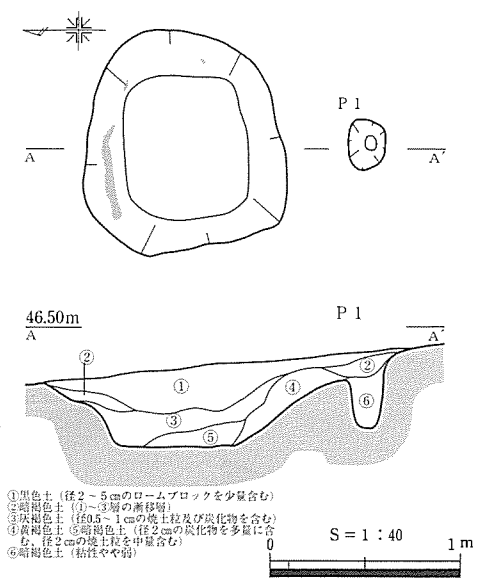
埋土は全体的に炭化物を含むが、特に最下層（⑦層）は炭化物を中心とした層で、北東側を中心に底面に炭が溜まっている状況であった。　（大野）



第58図　SK３



第59図　SK４



第61図　SK７

SK６（第60図、PL.14）Ｉ３グリッド北東部、標高約47.7～45.5ｍの谷部南側斜面で、製炭土坑の集中区よりやや離れて位置する。長軸1.78ｍ、短軸1.5ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.38ｍを測る。

被熱赤化面は、斜面上部側壁面である南西部壁面中心に認められた。また、北東隅は壁面立ち上がりが顕著ではなく（Ｃ－Ｃ′）、広い範囲で被熱赤化面が確認された。着火点であると考えられる。

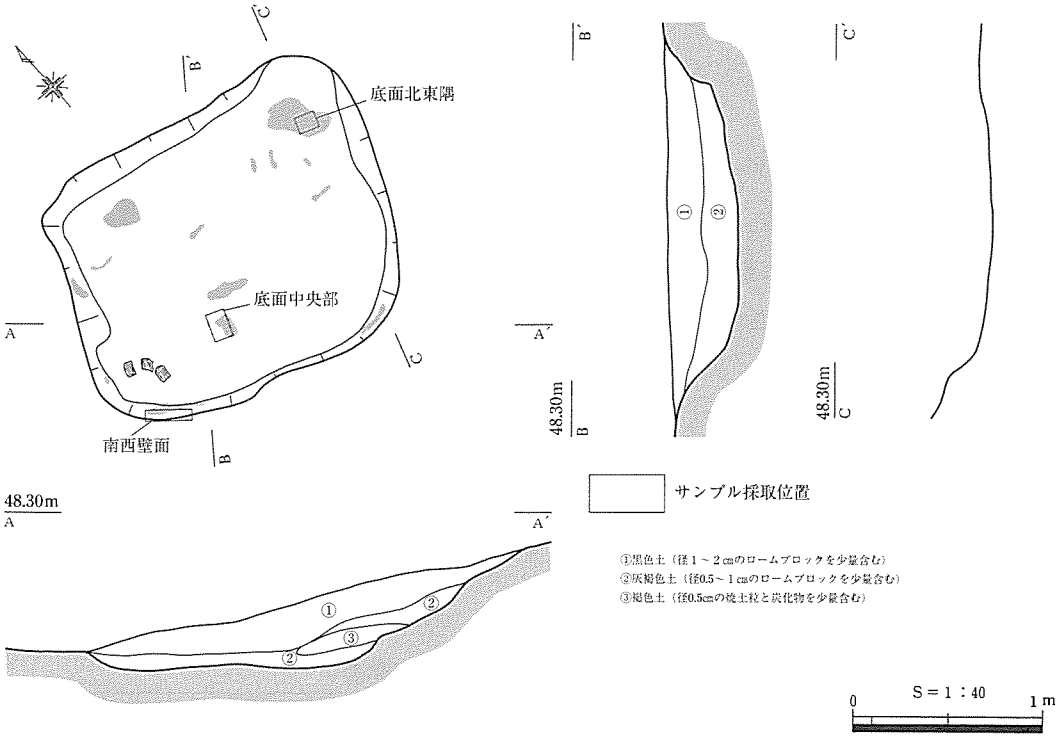
埋土の状況としては、底面に炭化物及び橙色の焼土粒が堆積しており、特に南西部底面には比較的大きな炭が集中して残存していた。

当遺構の被熱赤化面について土壌サンプルを採取し、岩石学的観察により焼成温度を測定している（第５章第１節）。（大野）

SK７（第61図、PL.14）Ｈ３グリッドのほぼ中央、標高約46.2～46.0ｍの谷部南側斜面に位置する。長軸1.14ｍ、短軸1.06ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.40ｍを測る。

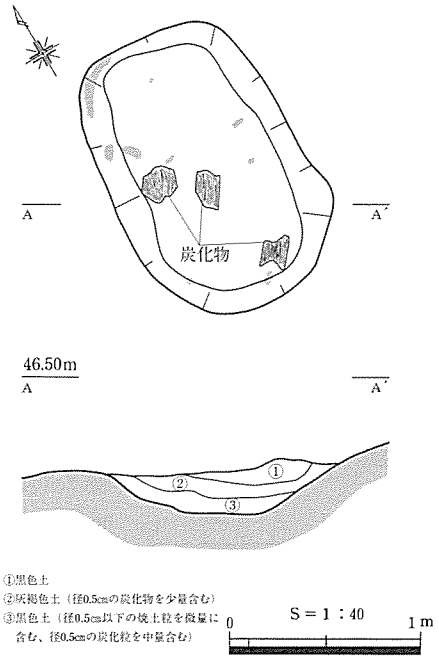
被熱赤化面は、斜面低部側壁面である北壁を中心に認められた。

また、SK７南側にＰ１（26×19－32）cmを検出した。SK７との位置関係から、SK７に伴うものである可能性が高いと判断されるものであるが、その性格については不明である。（大野）

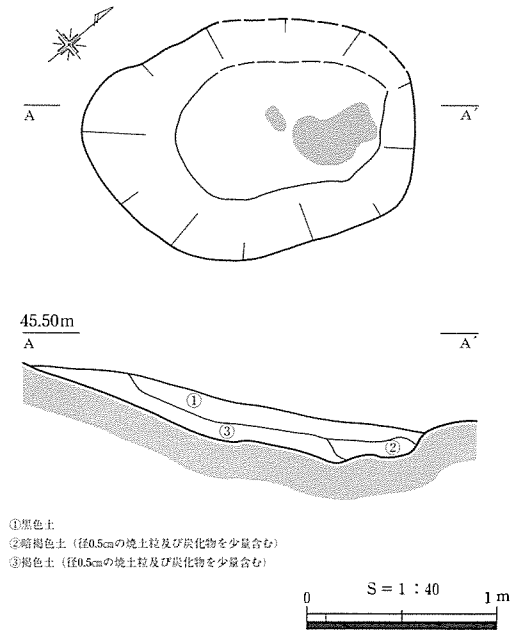


第60図　SK６

ＳＫ８（第62図、PL.14）Ｈ３グリッド北西部、標高約46.2～46.0ｍの谷部南側斜面中央で、ＳＫ４の南西側，ＳＳ１の北側に位置する。長軸1.56ｍ、短軸1.04ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.30ｍを測る。



第62図　SK８



第63図　SK10

斜面低部側にあたる北西隅の壁面を中心に、被熱赤化面が認められた。また、底面には比較的良好な状態で炭片が検出されている。（大野）

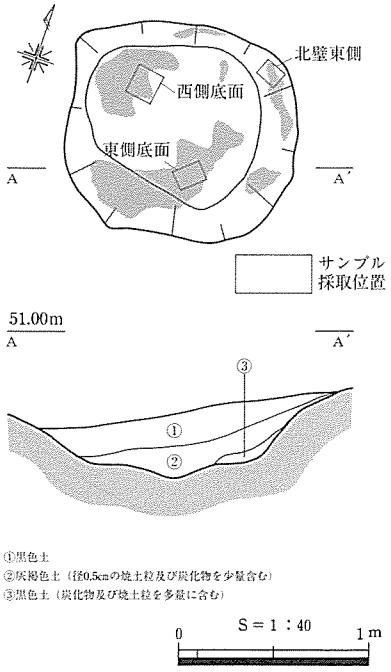
SK10（第63・65図、第17表、PL.14・20）Ｈ４グッリド北東部、標高約45.2～44.9ｍの谷部南側斜面中央、ＳＫ９の西側に位置する。長軸1.64ｍ、短軸1.24ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.24ｍを測る。

北側１／３ほど切株により壊されており、遺存状態は良好ではなかったが、北側底面の一部に被熱赤化面が検出された。

埋土中より石鏃（Ｓ６）が出土しているが、埋没段階での混入と考えられる。（大野）

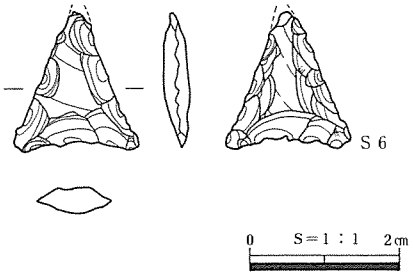
SK11（第64図、PL.14）Ｊ４グッリドのほぼ中央、標高約50.5～50.4ｍの南部平坦面に位置する。長軸1.24ｍ、短軸1.16ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で0.36ｍを測る。

全体的に被熱赤化面が確認されたが、特に、東側壁面と西側底面に顕著であった。



第64図　SK11

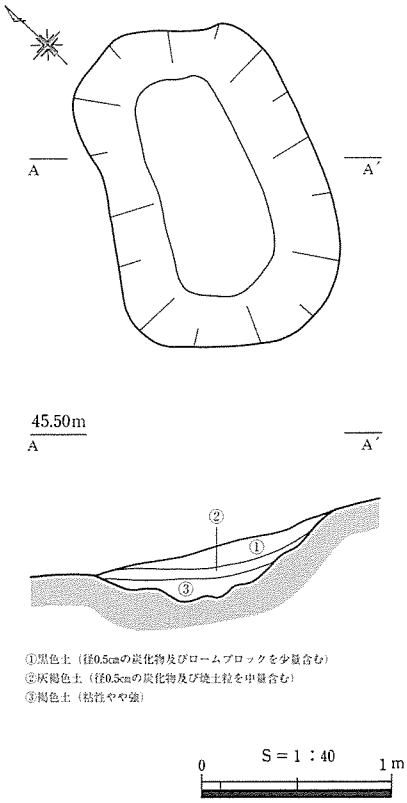
底面より出土した炭化物について、放射性年代測定を依頼したところ、7世紀後半～9世紀のうちにはいる可能性が高いという測定結果が得られている（第５章第２節）。また、当遺構の被熱赤化面について土壌サンプルを採取し、岩石学的観察により焼成温度を測定している（第５章第１節）。（大野）



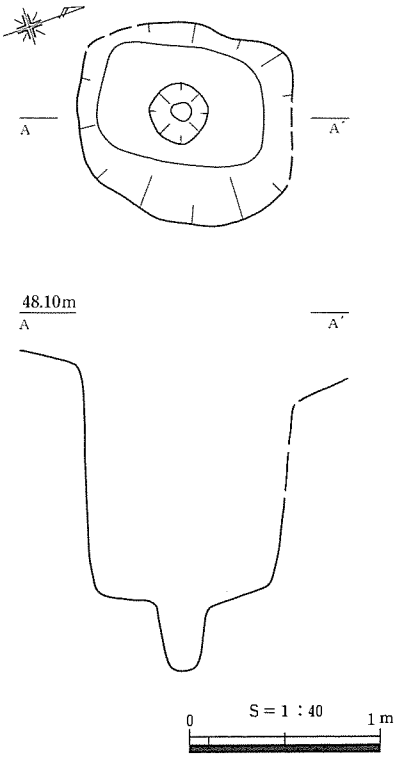
第65図　SK10出土石器

第17表　SK10出土石器観察表

No.	遺構・地区層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ［cm］	幅［cm］	厚さ［cm］	重量［g］	石材	備　考
S６	SK10 南端部	第65図 PL.20―２	石鏃	平基式無茎鏃	1.8	1.7	0.3	0.8	ガラス質安山岩	



第66図　SK９



第67図　SK12

（３）その他の土坑

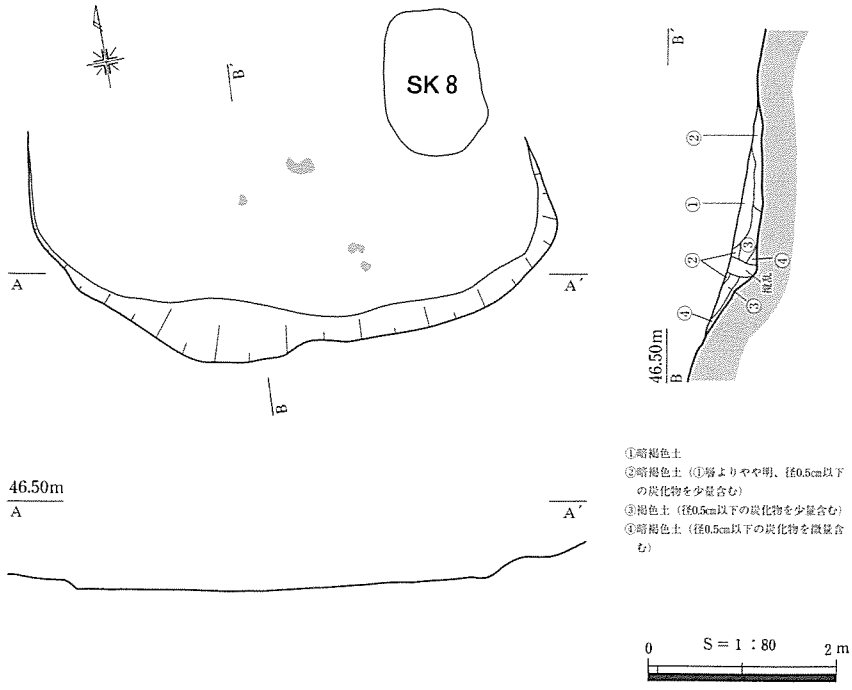
SK９（第66図、PL.14）Ｈ４グリッド杭上、標高約45.2～44.9mの北側斜面中央部に位置する。長軸1.56m、短軸1.04mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは最大で30cmを測る。SK３，SK４，SK８，SK10，SS１に囲まれる。製炭土坑に囲まれ、埋土中にも炭化物や焼土を含む層（第②層）をもつことから、なんらかの関係があるものと考えられるが、焼成面を持たないため、性格不明とした。　（大野）

SK12（第67図、PL.15）Ｉ２グリッド西側、標高約46.2 ～46.0mの南東側斜面で、SD２が長軸を壊す。長軸1.16m、短軸1.02mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大で1.62mを測る。

底面中心部に、径約31cm、深さ約35cmのいわゆる底面ピットを持つ。埋土は黄褐色系であったが、遺構であるという認識が遅れたため、土層断面図は作成できなかった。

土坑の形態的特徴から、落とし穴としての機能が想定される。

所属年代は不明であるが、遺構外より縄文時代前期および晩期の土器が出土しており、このいずれかの時期のものである可能性がある。　（大野）



第68図　SS１

（４）段状遺構

SS１（第68・69図、第18表、PL.15・20）Ｈ４グリッド北東側、標高約46.1～45.5mの南部平坦面から谷部にかけての北側斜面中央で、SK８～10の南側に隣接して位置する。

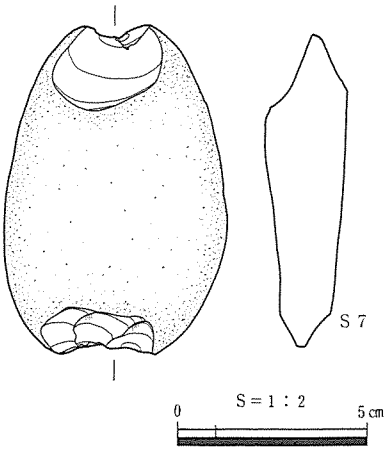
長軸5.62m、短軸2.48mの平坦面を造り出していた。検出面からの深さは最大で0.72mを測る。

底面に数箇所焼土が検出されたほか、ピットや壁周溝など上屋構造を想定できるような遺構は検出できなかった。

おそらく付属する施設等は存在しなかったものと思われる。

埋土中より石錘（Ｓ７）が出土しているほか、目立った遺物は出土しなかった。

製炭土坑に隣接するその位置関係から、製炭土坑群に付属する炭焼き時の作業スペースとしての性格が想定される。　（大野）



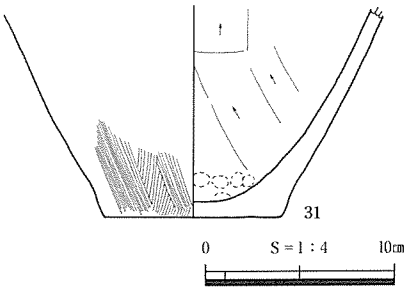
第69図　SS１出土石器

（５）溝状遺構

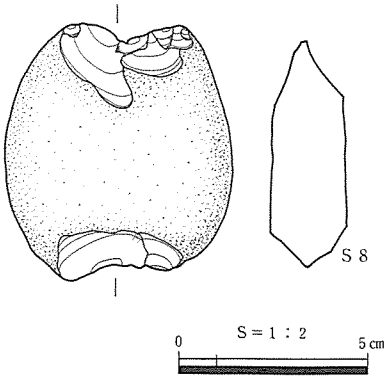
SD１（第39・70図、第19表、PL.19）Ｅ２グリッド、標高約45.1～44.2mの北部平坦面に位置する。長さ約5.7m、幅約0.8～1.1m、深さ約６cmの浅い溝状遺構である。埋土中に31の底部片など、土器片が多く混入していたため遺構としたが、不正形で深さも浅いことなどから、雨水などが流れた自然流路跡であるかもしれない。（大野）

SD２（第39・71図、第20表、PL.15・19）　Ｆ～Ｊグリッドラインまでのほぼ全域を囲む、方形の溝状遺構である。南西の一部は調査区外であったため検出できなかったが、本来は全周していたものと考えられるもので、標高約41.3～49.8m、長辺（東西）約39m、短辺約27m（南北）、検出面からの深さは最大で0.24mを測る。出土遺物は埋土中より、石錘（Ｓ８）のほか、土器細片が数点出土したのみであった。当初表土と類似した暗褐色系の埋土をもつことから、新しい時期のものと考えていたものであるが、溝内中心部から製炭土坑に関係ある遺構群（ＳＫ３など）が、北東隅には弥生末～古墳時代初頭の儀礼跡（SK13）が検出されていることから、これら溝内側で検出された遺構に伴う可能性が高いと判断したものである。溝底面の標高としては、全体的に見て南辺が約47.5～49.0mと高く、北辺両隅：北東隅（約44.5m）北西隅（約41.5m）に向かって下っており、溝は丘陵下に逃げていない。従って、この溝に水を流すと、最も低い部分にあたる北辺両隅部に水が溢れてしまう構造であり、排水など、水を流す目的の溝ではなかったものと考えられる。この溝の性格について、単に区画を示すためのものであるならば、遺構の切り合い関係などからみて、製炭土坑群に伴う可能性もあるが、現段階では判断できなかった。今後の類例の増加に期待したい。

（大野）



第70図　SD１出土土器



第71図　SD２出土石器

第18表　SS１出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 [g]	石材	備　考
S７	SS１ 埋土中	第69図 PL.20－２	石鏃	長軸の両端を欠く	8.1	5.9	2	131	角閃石安山岩	

第19表　SD１出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
31	SD１ 埋土中	土師器 甕 底部	第70図 PL.19－１	器高:△11.0cm 底径:※9.4cm	底部 １／２	外面：胴部ハケ、底面ナデ 内面：胴部ケズリ、底面指オサエ	橙色	密、5.5mm以下の砂礫を多く含む	

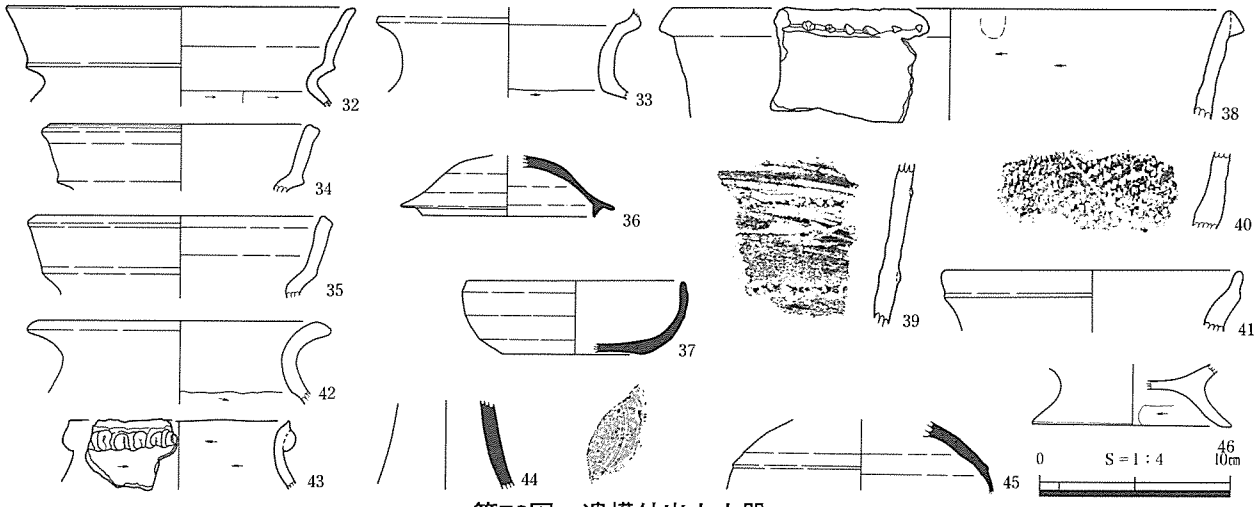
第20表　SD２出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 [g]	石材	備　考
S８	SD２ 埋土中	第71図 PL.20－２	石錘	長軸の両端を欠く	6.8	6.1	2	101	角閃石安山岩	

第４節　遺構外出土遺物（第72・73図，第21・22表，PL.19・20）

遺構外から出土した遺物は、ほぼ表土中に混入した状態で出土したものである。土器としては、遺構が検出されている弥生時代末～古墳時代前期の土師器（32～35・46）のほか、更に新しい時期の須恵器や土師器（36・37・41・45）が出土している。これらは古墳時代中期や奈良平安時代のもので、当該期の遺構は確認できなかったが、底部に回転糸切り痕をもつ須恵器坏37などは、製炭土坑に近い時期のものであるかもしれない。また、縄文時代前期（39）、晩期（38）の縄文土器も出土しており、落とし穴であるSK12はこれらのうちいずれかの時期のものであろう。

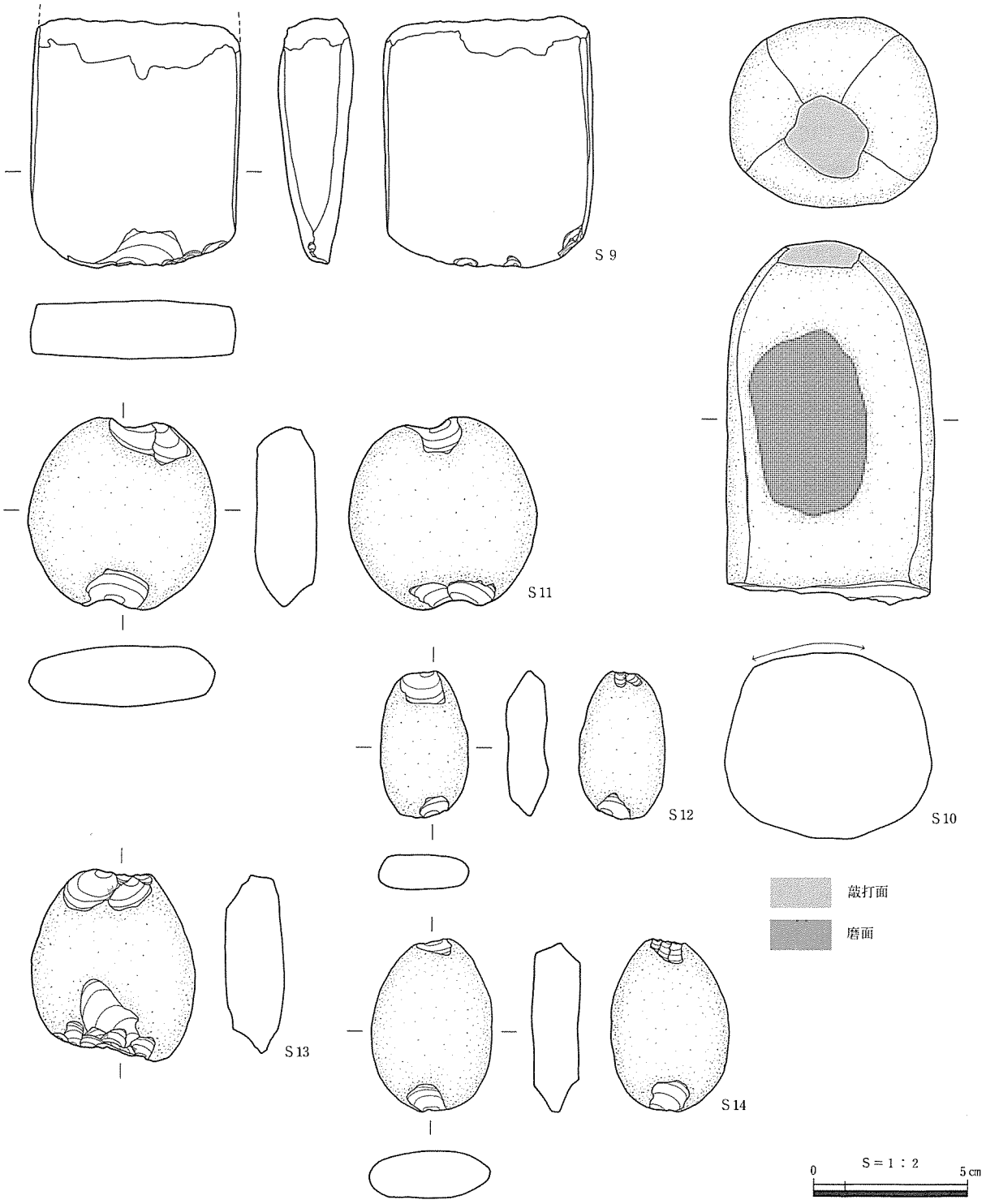
石器としては石錘（S11～14）、磨製石斧（S9）、敲石（S10）が出土している。　（大野）



第72図　遺構外出土土器

第21表　遺構外出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位	器種	挿図 PL	法量〔cm〕	残存率	調　整	色調	胎土	備　考
32	E２ グリッド	土師器 甕 口縁部	第72図 PL.19－１	器高:△5.1cm 口径:※18.4cm	口縁部 １／２	外面:ナデ 内面:口縁部～頸部ナデ、頸部以下ケズリ	灰黄褐色	密	外面煤付着
33	E２ グリッド	土師器 壺 頸部	第72図 PL.19－２	器高:△5.7cm	頸部 １／４	内外面：ナデ	橙色	密	
34	H４ グリッド	土師器 甕 口縁部	第72図 PL.19－２	器高:△4.4cm 口径:※15.0cm	口縁部 １/8以下	内外面：ナデ	にぶい橙色	密	
35	H４ グリッド	土師器 甕 口縁部	第72図 PL.1－２	器高:△3.5cm 口径:※13.7cm	口縁部 １／６	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	密	
36	E２ グリッド	須恵器 坏蓋	第72図 PL.19－２	器高:△3.3cm 口径:※内9.2cm 外11.35cm	全体 １／６	外面:上部回転ヘラ切り→ナデ 下部回転ナデ 内面:天井部ナデ、下部回転ナデ	暗灰黄色	密	
37	試掘 トレンチ	須恵器 坏身	第72図 PL.19－２	器高:4.9cm 口径:※11.3cm	全体 １／６	外面:体部回転ナデ、底部回転糸切り　内面:回転ナデ	灰色	密	
38	H４ グリッド	縄文土器 深鉢	第72図 PL.19－２	器高:△5.8cm 口径:※29.6cm	口縁 １/８以下	外面:ナデ 内面:ケズリ→ナデ	浅黄色	密、１㎜の砂礫を多く含む	口縁部に刻目をもつ突帯文、胴部外面煤付着
39	E３ グリッド	縄文土器 深鉢	第72図 PL.19－２	器高:△8.5cm	全体 １/８以下	外面：条痕 内面：ナデ	橙色	密	外面に刻み目を持つ微隆帯文 西川津式B類
40	試掘 トレンチ	縄文土器	第72図 PL.19－２	器高:△3.9cm	胴部 １/８以下	外面：縄文 内面：ナデ	にぶい黄色	密、１㎜の砂礫含む	縄文中期？
41	遺構外	土師器	第72図 PL.19－２	器高:△3.2cm 口径:※15.4cm	口縁部 １/８以下	内外面：ナデ	灰黄色	密	
42	試掘 トレンチ	土師器 甕 口縁部	第72図 PL.19－２	器高:△4.4cm 底径:※14.6cm	口縁部 １／６	外面:ナデ 内面:口縁～頸部ナデ、頸部下ケズリ	にぶい黄橙色	密	
43	遺構外	弥生土器？ 壺？	第72図 PL.19－２	器高:△3.7cm 口径:※11.6cm	口縁部 １/８以下	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色	密	口縁部に棒状工具で凹凸を付けた突帯を貼り付ける　弥生中期？
44	遺構外	須恵器 高坏？ 脚部	第72図 PL.19－２	器高:△4.8cm	脚部 １／４	内外面：回転ナデ	灰色	密	
45	遺構外	須恵器 坏蓋	第72図 PL.19－２	器高:△3.8cm	全体 １/８以下	外面:上部回転ヘラ切り→ナデ、下部回転ナデ 内面:回転ナデ	灰オリーブ色	密	
46	遺構外	土師器 低脚坏 脚部	第72図 PL.19－２	器高:△3.3cm 底径:※9.3cm	脚部 １／４	外面:ナデ 内面:坏部ナデ、脚部ケズリ	にぶい黄橙色	密、５㎜の礫含む	



第73図　遺構外出土石器

第22表　遺構外出土石器観察表

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	種　類	特　徴	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 [g]	石材	備　考
S 9	F 2 グリッド	第73図 PL.20－２	磨製石斧	表裏、両側面に斜め左から右にかけて明瞭な擦痕	8.1	6.8	2.5	261	蛇紋岩	基部の大部分折損 刃部刃こぼれ
S 10	G 3 グリッド	第73図 PL.20－２	敲石	擦石との複合石器	11.8	6.8	6	820	石英安山岩	基部折損
S 11	H 3 グリッド	第73図 PL.20－２	石錘	円礫の両端を欠く	6.2	6.1	2.1	108	角閃石英安山岩	
S 12	L 4 グリッド	第73図 PL.20－２	石錘	長軸の両端を欠く	5.8	2.8	1.1	22.4	安山岩	
S 13	遺構外一括	第73図 PL.20－２	石錘	長軸の両端を欠く	6.7	3.9	1.6	43	安山岩	
S 14	遺構外一括	第73図 PL.20－２	石錘	長軸の両端を欠く	6.2	5.3	2	85	石英安山岩	